

アイヌ民俗文化財

ユークラシシリーズ40

金成マツ筆録 アイヌ英雄叙事詩

# コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る

コタンラウンクル アウエンユビ アトクセホニヒ シリコオテレケ

蓮池 悦子 訳

北海道教育委員会

# コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る

コタンラウンクル アウエンユビ アトクセホニヒ シリコオテレケ

# 目次

凡例と解題	7
表題	7
編集要綱	7
脚注と引用文献略記号	7
物語 コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る	9
第1章 トミサンベチ・シヌタブカ	9
1.1 平和な日常	9
1.2 兄が出自を語る	10
1.3 兄が交易に出かける	10
1.4 育てのお婆の異常な行動	11
1.5 コタンラびとの異常な行動	12
1.6 ニソシッチウエ神の女盗り事件	13
1.7 コタンラびとの弁明	14
1.8 兄の帰還	14
第2章 遭難	15
2.1 熊神来訪	15
2.2 異常な雪嵐	15
第3章 ルベットムの人々	16
3.1 シヌタブカへの思慕	16
3.2 交易船	17
3.3 和人の国	17
3.4 魔神とコタンラびと	18
3.5 夢見	20
3.6 魂呼び戻しの術	21
3.7 解き明かし	21
3.8 再びシヌタブカ姫が語る	22
第4章 再びシヌタブカへ	23
4.1 熊神が夢で兄に語る	23
4.2 熊送りの準備	24
4.3 招かれた客たち	25
4.4 明かされた真実	26
4.5 コタンラびとへの懲罰	27
4.6 熊送りの宴	27
4.7 縁結び	28

4.8	別れ	29
第5章	再び平和な日常	30
5.1	新居	30
5.2	再会	30
5.3	初夜	31
5.4	最高の人生の終わり方	32
コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る		35
第1章	トミサンベチ・シヌタプカ	37
1.1	平和な日常	37
1.2	兄が出自を語る	46
1.3	兄が交易に出かける	53
1.4	育てのお婆の異常な行動	59
1.5	コタンラびとの異常な行動	68
1.6	ニソシッチウェ神の女盗り事件	84
1.7	コタンラびとの弁明	103
1.8	兄の帰還	116
第2章	遭難	125
2.1	熊神来訪	125
2.2	異常な雪嵐	129
第3章	ルベットムの人々	137
3.1	シヌタプカへの思慕	137
3.2	交易船	152
3.3	和人の国	160
3.4	魔神とコタンラびと	166
3.5	夢見	200
3.6	魂呼び戻しの術	216
3.7	解き明かし	227
3.8	再びシヌタプカ姫が語る	236
第4章	再びシヌタプカへ	253
4.1	熊神が夢で兄に語る	253
4.2	熊送りの準備	273
4.3	招かれた客たち	283
4.4	明かされた真実	297
4.5	コタンラびとへの懲罰	305
4.6	熊送りの宴	314
4.7	縁結び	319
4.8	別れ	343
第5章	再び平和な日常	351
5.1	新居	351
5.2	再会	360

5.3	初夜 . . . . .	369
5.4	最高の人生の終わり方 . . . . .	381

# 凡例と解題

本編は、金成マツが 1931(昭和 6)年 8 月 6 日に筆録を終了しました。マツ満 55 歳の時です。

## 1. 表題

この叙事詩の表題としてマツは冒頭に *Kotanra un kuru Awen yubi Atokse honihi shirko oterke,menoko yukara* と記しており、金田一京助は「金成まつユーカラ集目録」(『アイヌ叙事詩ユーカラ集 I』 pp13-19)で「42 婦人のユーカラ、コタンラウクルなる我が悪兄が我が腹を踏んで踊る物語」と和訳しています。

この筆録ノートは 3 編のユーカラと 2 編のウウエペケレ(昔話)が一冊に製本されたもので、金田一の手跡で INDEX 欄に I. オランナイの曲 II. それを着ると何でも見える鎧の物語 III. 婦人のユーカラ、コタンラウクルなる我が悪兄が我が腹を踏んで踊る物語 IV. 一人の白い瘡ぶたのある女が東の方から来る昔話 V. パナンペ ペナンペの昔話という和訳が書かれています。このうち I. は蓮池悦子「金成ノート覚え書 オランナイ」(『北海道の文化 56』 pp27-36 北海道文化財保護協会 1987.2)、IV は萱野茂「かさぶたの女神」(『炎の馬』 pp89-99 すずさわ書店 1977)として発表されています。

## 2. 編集要綱

本書では原テキストを以下の要領で編集しました。これは 2009 年 3 月刊『ユーカラシリーズ 32 金の草靴の六人の兄』 pp.10~11 切替英雄執筆編集要綱に準拠しています。(a) 叙事詩のリズムに合わせ、1 行が 4 音節ないし 5 音節に収まるよう行を改めました。但し、金成マツの文体はしばしば 6 音節以上になることもあり、本書でも散文的傾向はますます強くなってきています。(b) マツの原テキストは人称接辞を中心に大文字で筆録されることもありますが、大文字の使用を文頭と固有名詞の頭に限定し、そのほかの大文字はすべて小文字に換えました。(c) 原テキストにはピリオドやコンマなどがほとんど用いられていません。本書では句読法を指示するピリオド、コンマ、コロなどを適宜補いました。(d) 語、助詞はその境界で切りました。但し、助詞が連続するさい、この原則に従わないこともあります。(e) 語、助詞が空白や改行によって途中で切断している場合はそれらの断片を結合しました。(f) 長大な動詞が 2 行にまたがるときは、1 行目の末尾にハイフンを補いました。(g) 原テキストでは人称接辞は人称語幹と結合されて示されていますが、本書ではこの境界にハイフンを挿入しました。(h) 原テキストにはない章立てを入れ、見出しをつけました。これらの見出しは、上下の欄外(柱)にも掲げました。(i) アイヌ語片仮名文は原テキストにはないものです。これは、切替英雄・山下浩一両氏作成ローマ字片仮名変換プログラムによって編集しています。(j) アイヌ語片仮名文の下に記した逐語訳は、各語の中心的な意味を示すような訳語を当てました。本書の逐語訳は、切替英雄・高橋靖以両氏のご協力をいただいて作成したものです。(k) 物語の大意を把握するために「物語 コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る」をつけました。

## 3. 脚注と引用文献略記号

訳註に引用した文献の略号と数字は以下の出典と頁です。

研 金田一京助著『ユーカラの研究二』(東洋文庫 1931)(幌別方言話者金成マツ口述・金田一京助筆録)

研 W 前掲書のうち、日高、沙流方言話者鍋沢ワカルパ口述・金田一京助筆録のもの

コタンラビとに腹を踏まれた姫が物語る

- B ジョン・バチェラー著『アイヌ・英・和辞典第四版』(岩波書店 1938)
- 金 I～VIII 金成まつ筆録／金田一京助訳註『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I～VIII (三省堂 1959～1968)
- 人 知里真志保著『分類アイヌ語辞典人間編』(『知里真志保著作集別巻 II』平凡社 1975)
- 植 『分類アイヌ語辞典植物編・動物編』(『知里真志保著作集別巻 I』平凡社 1976)
- 地 知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(北海道出版企画 1984 復刻、初出；1956)
- 語法 知里真志保著『アイヌ語法概説』(『知里真志保著作集 4』平凡社 1974)
- 教 I～28 金成マツ筆録／蓮池悦子ローマ字翻刻片仮名整理／萱野茂分解訳と和訳『アイヌ民俗文化財ユーカシリーズ』I～28 (北海道教育委員会 1979～2006)
- 教 29～31・34・37 金成マツ著／蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカシリーズ』29～31・34・37 (北海道教育委員会 2007～2011)
- 教 32 金成マツ著／高橋靖以・切替英雄・蓮池悦子訳『アイヌ民俗文化財ユーカシリーズ』32(北海道教育委員会 2009)
- 切 切替英雄編著『アイヌ神謡集辞典』(大学書林 2003、初出；北海道大学文学部言語学研究室 1989)
- 聖 久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店 1977)
- 萱 萱野茂著『萱野茂のアイヌ語辞典』(三省堂 1996)
- 田 田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館 1996)

# 物語 コタンラビとに腹を踏まれた姫が 物語る

## 第1章 トミサンベチ・シヌタプカ

### 1.1 平和な日常

幼かったあたしシヌタプカ姫と姉さまイコシク  
プマツを、シヌタプカ城主である兄さまイレスユ  
ピと、一人のおばさまが育てていました。

今はもう二人ともかなり大きくなって、姉さま  
は水汲みや掃除もできるようになりました。あた  
しは、昼は炉の中で灰まみれになって一人遊びを  
し、夜は左座にある姉さまの寝床で抱き合っ  
て寝ていました。

兄さまにかなう風貌の人は、どこの村にもど  
この国にもいません。兄さまは、いつも濃いも  
やに包まれ、刀や鎧兜はもちろんのこと、襲  
ね着したきららん金襴の衣装もすばらしい。育てのおば  
さまも、言葉で表せないほどの美人です。

あたしたちのお館、この大館おおだての内部は、いくら  
褒めちぎっても足りないほど美しく飾られて  
いました。横座のかみてには、大切なじゅうき什器祭器が、  
低い崖のように並んでいて、そのあたり一帯に  
神の靈光がピカピカ光を放っています。その上  
方には、何本もの首領の太刀や肩から下げる平  
織りの刀帯が壁にかかっている、吊り帯端エムシブサにつ  
いている四角い布がゆらゆら揺れていました。

宝列のすぐ手前には、美しい台座があっ  
て、その上で兄さまが毎日刀鞘の彫刻や宝器  
表の彫刻に熱中していました。

右座側には、宝列の手前から、美しい女おんな筐なごの列  
が、下座の隅まで連なっています。その前  
面には、美しい女持ちの枕が伸びていて、  
その上方には、どんな容貌のお方がつく  
ったものなのか、神々しいほど美しい小  
袖、金糸銀糸の刺繍衣で上下二段の掛  
拵がしなっています。その上には神々  
しい光が照り輝いていました。ま  
ったく好ましく心動かされる光景  
です。

こがねいろ 黄金色の床には、ずらっとござが敷きのべられ、  
戸口へ向かって、黄金の炉縁がルマイベ色に伸び  
ています。

育てのおばさまはいつも針仕事に励んでいて、  
その刺繍はいくつもの神々しい雲となって立ち昇  
るほどでした。あたしの姉さまも、毎日刺繍を訓  
練して、今はもうすっかりじょうずお上手です。

あたしも刺繍のまねごとをし、膨らんだり縮ん  
でひきつれた針運びのものを兄さまやおばさま、  
姉さまに見せると、三人は鼻をおさえ口をおさ  
えて驚き、あたしが上手だとほめそやしました。  
でも何となくあやしい。見れば、三人ともいっ  
せいに後ろへ振り向いて、クスクス笑っていた  
のでした。腹を立てたあたしは、仰向けになっ  
て両足をバタバタ宙に蹴り上げ、床にゴロゴロ  
転げまわって泣き叫び駄々をこねました。三人  
は頭を掻き掻き口々に言うには、

「何をそんなに泣くんだい？ びっくりするよ  
うなお声で泣くものだな。内女中や外づかいの  
女中が何か言ったので、それを笑ったのだ。そ  
なたがこんなにお上手なのに、何でそれを笑  
うもんか。絶対そなたを笑ったのではない。  
さあさあ、気をとりなおして刺繍を続けな  
さい」

となだめられ、あたしは泣きながらも、また  
その下手な刺繍へたに励んだものでした。

若さが追いかけ合うようにどんどん育ち、  
今はあたしもかなり大きくなりました。あたし  
は美しく、濃いもやに包まれています。

兄さまは、首骨も折れんばかりにニコニコ  
なずきながら、あたしを可愛がってくれまし  
た。

皆にからかわれた刺繍も今では雲となっ  
て立ち昇るほど。兄さまは、手びさしを高  
く低くかかげながら、あたしの刺繍をつ  
くづく見調べ、

「わがちっちゃな妹は、昔はあんなにお  
上手だったのに、今は何とまあ、お下手  
になったことよ

なあ」

と言って皆で笑い合いました。あたしはちよっぴり恥ずかしかったわ。

兄さまは狩りでたくさんのお獲物をとって来たので、脂肉の美味しいそばかりを腹一杯食べながら暮らしていると…

## 1.2 兄が出自を語る

ある日のこと、兄さまがこう言いました。

「これこれ。妹たちよ。わが申し述べることを、しっかり聞きなさい。

これなるわが村の名は、トミサンベチ・シヌタプカである。

その昔、われらが父上は人間ではあったけれど、男っぷり・胆力・弁術において、神界はもとより人間界でも傑出してた。それが嫉妬の対象になり、遠在近隣の者たちが連合軍を組んで父上に敵対した。それ故父上は、戦いばかりの苦しい半生を送らざるを得なかった。

また、昔からわれらの一族であるイヨチびとには、妹が一人いた。イヨチ兄妹は、どんな戦さでもわれらが父上に加勢して苦勞を分かち合ってくれた。そこで、休戦時に同盟の証しとして、それぞれの妹と結婚することにした。

トミサンベチ・シヌタプカから、父上の妹であるわれらの叔母がイヨチ城に嫁入りした。イヨチからは、イヨチ姫がトミサンベチに嫁入って、われら三人が生まれたのだ。

今くおば>とわれらが呼んでいる者は、われらの母者が嫁としてやって来たとき、イヨチから小間使として連れて来た<子守のばあや>なのだ。そなたたちがまだ幼いうちに、われらが両親は神の国へと旅だった。それゆえ、われらは皆、このばあやに育てられて成長したのだ。

イヨチ城では男の子が一人生まれた。しかし、叔母夫婦も、人間界では気苦勞がたえないから天国でまことの結婚生活をしようと神の国へ旅立ってしまい、幼い男の子一人が遺された。

わが両親とイヨチ夫妻の遺言はこうであった。

-わが従弟イヨチびと殿とわが下の妹は、同じ布を半分に分けて裁ったおむつで包み、二人の耳輪をそれぞれ交換して許婚者同士として育てよ。

また、わが伯父先代のコタンラびとは、定まった妻もないまま一人の男の子を遺して亡くなった。その遺児である当代コタンラびととわが上の

妹を許婚者同士として育てよ-と。

というわけで、そなたたち二人とも婚約者がいる娘なのだ。たとえ犬であっても、男を見たら決して話しかけたり、笑いかけたりするんじゃないぞ。貴婦人としてのマナーやモラルをしっかり守っていくのだよ」

とおっしゃいました。

ああ何と意外や意外。こんな立派な両親がいたのに、シヌタプカ一族を妬んだ人々が次々と戦さを仕掛けてくるこの世に嫌気がさして、あたしが物心つかないうちに亡くなったそうなの。姉さまもあたしも後ろへ振り向いて涙を流しました。

その上またイヨチやコタンラに婚約者がいて、あたしたちが年頃になったら結婚なるものをするともおっしゃったから、半分は気恥ずかしかったけれど、その一方ではどんなお顔の方なのかしら、ああ早く見たいなあと思いながら暮らしていたところ…

## 1.3 兄が交易に出かける

ある日のこと、兄さまがこう言いました。

「これこれ。ばあやと妹たちよ。わが申し述べることをよく聞きなさい。

われは、ようやく一人前の男といえるほどの年になったから、和人との交易に出かけることにする。

その昔、わが先祖や祖父たちが和の国へ交易に行ったので、わが幼少のころは、和人の酒や米だの菓子だのを好んで食べたのであったが、祖父の死後、われらはみな幼かったから、今までずいぶん長い間、和との交易もなかったのであった。祖先を継ぐ者、神祀りする当主がわれであるゆえ、一族に従弟たちがたくさんいても、われが最初に交易に出かけることにする。出発前に親戚一同を招んで、神祀と先祖供養をしよう。うまき酒を飲み、うまき物を食べながら、善き事も悪き事も語りつくし、面白き遊びもして大いに愉しもうではないか。

わが片足は沖へ向けても、わが片足は陸地にいるそなたらに心をかけながら行ってくるぞ。この世には、われらを嫉み、われらに悪戯する者ばかりがたくさんいるのだよ。自分の身を大切に、そなたたち二人で、シヌタプカの館を預かり守っているのだぞ。

留守中何か困ることがあったら、すぐ、わが従弟

コタンラびとに知らせなさい。そうすれば必ず助けてくれるはずだからな」

と、おっしゃいました。

兄さまは、あんなにもまあ、いつもあたしたちに目をかけていてくださったのに、一日たりともお顔を見ないで過ごせるかしら？ でも、交易がアイヌの習慣とあればしかたがない。でもお土産も楽しみなので早く出発しないかなあと、姉さまと囁きあっていました。

兄さまは、あたしたちの心のうちを見通しているかのように何度もうなづきながら、

「コタンラびとにはよく言っているから、東の間、そなたたちをシヌタプカ城に残して出かけても神々が守ってくれるであろうぞ。あまり淋しがらずに留守番していなさい」

と言いつけながら、屈強な若者二人に手伝わせて熊皮や鹿皮を交易船に運び込み、和人への礼装を整えてから、はるか沖に行ってしまいました。

#### 1.4 育てのお婆の異常な行動

その翌日、ばあやがパッと立ち上がって、こんな荒々しい言葉を浴びせました。

「アチカラタ、アヤカンナタ(ああいまいまい、腹が立つ)！ 憎らしい姪っこめら！ 若いせいで、あんたら二人だけが、夫の名を教えてもらったようだね。あちしだってくおばさん>と呼ばれていても、まだまだ若い女なのであって、あちしに夫を持たせもしないでああいうことを言うってか？ あんたらは、どんなことでもしたいようにするがいいさ。あちしはこれからわが故郷イヨチ村に家出して、イヨチの甥っこと結婚して幸せに暮らしてみせるからな」

と言って、祖母や母ゆずりの絹だの首飾りや耳輪など上等なものばかり入っている長持ちを出してきて、今まで着ていた着物を炉端に脱ぎ捨て、中にあった衣装を身につけてから髪の毛を鉢巻きで高く抑えました。着物や飾り物のせいで、ばあやは何とまあ美人に見えたこと。

姉さまは目を丸くして見ていましたが、やがて怒りを顔じゅうにみなぎらせ、こう言いました。

「これはこれは、呆れたものね！ いかれたろくでなしばあやめ。言うにもことかいて、とんでもない言いぐさとその振る舞い。不届き千万だわ。ほんとにまあ！ これまで淑女のような立ち居振る舞いとよき心根でもってわれらを育ててくれたか

ら、わらわが結婚して自活できるようになったら、妹とともに孝養をつくそうとばかり思っていたのに、今はすっかり淫魔の邪神に憑かれた女になりさがったようね。兄さまがいる間に言えればいいものを、兄さまが教え聞かせ、神の加護を願いながら言いつけなされたその言葉を、そなたは聞いていないものだから、自分だけ独り身でいるのを馬鹿にされると勝手に思い込んで、われらが母者の形見である先祖伝来の装束を盗み、わが妹の許婚者イヨチびとをも盗んで、われらに復讐しようというわけね」

すると、ばあやはカラカラとあざ笑い、

「ああ腹が立つ！ しゃらくさい。まだ小娘のくせに一人前の口を利きやがって！ 色きちがいとか男を欲しがるとか、何のことかわかってしゃべっていやがるのか」

と言ったところ、姉さまはフムツと氣勢をあげてサッと立ち上がりました。

「何をぬかすか、ろくでなしの淫乱女めが。いやはや恥ずかしくもなく笑止千万な言いぐさをば、死にたくて、くたばりたくて、よくしゃべること。何とまあくよいおばさま>ぶりだこと！」

と言って、ばあやの髪の毛を手に巻き付け、台座に叩きつける音がドシンバシン。

ばあやがフムツと気合いを入れてパッと立ち上がったので、あたしもサッと立ち上がり、姉さまと二人で、ばあやから背負い荷をもぎ取りました。

ばあやは何と強かったことか。あたしたちがばあやに跳びかかって、引きむしったり殴ったりすれば、ばあやもあたしたちをむしり返し、殴り返します。いつまでたっても勝負が付きそうもないので、姉さまが

「妹よ。今すぐ、わが許婚者コタンラびとに知らせてちょうだい。ろくでなしばあやが言ったこと、やったことを全部言って聞かせなさい。走って行くのよ。あのばあやは、そなたの許婚者イヨチびとを寝取ろうとしているのだからね」

とおっしゃったから、『なるほど、そうだ』と思って、あたしは外に跳び出しました。

シヌタプカの館が建っている山の頂上から浜へ降りる広い道は、九十九折にうねうねと続いていました。使いに出されて走るその音が、耳元でヒュルヒュルうなっています。

## 1.5 コタンラびとの異常な行動

話に聞いていたコタンラ村は、軒を連ねる人家の数は少なく、村の真ん中に盛り上がる頂上平らな岩山の上に、大きな館と柵構えが重なり建っていました。あたしのお館だけがすばらしいと思っていたら、同じくらいかちよっぴり超えるくらいの程度だったかしら。

あたしが玄関土間に入っていくと、シヌタプカのお館と同じように、内土間の中から神気や財宝の香りが強風のように吹いてきて、あたしをあどすさりさせるほどでした。母屋戸口のすだれ戸をパッと開け、あたしは光を放つもやに包まれたまま、内土間にサッと入っていきました。

コタンラのお館内部には、シヌタプカと同じような宝物が飾られていて、宝壇の手前にある台座の上には、もやの小山がどっしり腰をすえています。

もやの中を眼力で散らし見ると、兄さまより一歳ほど年下らしい青年で、兄さまとそっくり同じ刀や衣装を身につけています。館に飛び込んできたあたしを驚いて見つめながら、あたしを包むもやの真ん中を見ようとして何度も失敗したあげく、ようやく目が届くと、その顔色が真っ青になりました。そうして、うやうやしく伏し目しながらも、じっとあたしを観察しているうち、ブイとあたしに背を向け、刀鞘の彫刻に没頭し始めたのでした。

あたしはもじもじ遠慮して自分の着物の袖山をおぞおぞ噛みつつ、言葉もつかえつかえ、合間にコホン、エエーッと咳払いもしながら、使いの口上を述べました。まさかコタンラびとがそんな態度をとるとは思わなかったのに、知らんぷりして振り向きもしません。こんなことってある？言葉を換えてくり返しても、てんで見向きもしやあしない。『耳が聞こえないのかしら？』と思っただけあたしは大急ぎで台座に近寄り、また同じように言ったところ、コタンラびとの立ち上がる音がシュッとしました。

「これはこれは、けったくそ悪い従妹よ。誰が急に耳が聞こえなくなったとて、うんざりするほど大声でしゃべっているのか。何をしてもそなたたちの手に負えるお婆ではないのに、無礼千万にもそんなことを言ったりしたのか」

と言って、まだ幼児体型であるあたしのぼっこ

りしたお腹を蹴飛ばしドシンドシン踏みつけました。あたしはムの根っこみたいに左座までコロコロ転がりました。息も詰まって気が遠くなるほどびっくりしたあたしの泣き声が響き渡ります。

ちょっとしたことさえまだ出来ない弱小者のあたしが何をしたからといって、コタンラの奴があたしのお腹を踏みつけ大恥をかかせるのか。奴にそんなひどいことをする権利がないわ、情けない。あたしたちを助けたくないなら口でそう言えればいいのに、口惜しい。あたしは飛び起きてパッと外に飛び出しました。『かわいそうに、姉さまはどんなに待ち遠しがっていることか。二人がかりでさえ負けそうだったのに、姉さまは今たった一人で戦っているのだわ』とあたしは思い、姉さまを案じながら跳んで行く音ドシンドシン。

トミサンペチ城への登り口に、ばあやの姿がありました。ボロボロに裂けた着物は、投げ縄みたいなひも状の輪になってくっついていて、裾の片側はuzzi上がり、もう片方は下にuzzi落ちていて、背負い袋の負い縄は今にも頭からはずれそう。あたしを見るなり、

「アチカラタ、アヤカンナタ！ につっき姫っこめ。あんなにもあちしが苦勞して育てたのに、恩を仇で返しやがるのか。この先ただでは済まないからな」

と言って、泣きじゃくりながらあたしを通り越して、はるか向こうに行ってしまいました。

あたしがシヌタプカの館に跳び込むと、台座の上には組み討ちの跡が歴然と残り、奪い返した首飾りや耳輪が台座に散らかっていて、姉さまがあたしの帰りが遅いのを案じながら掃除をしていました。あたしは泣き声まじりでコタンラびとの仕打ちを詳しく報告しました。

国土が一日中地震で揺れているほど驚きながら聞き終えた姉さまは、怒りもあらわに

「アチカラタ、アヤカンナタ！ コタンラめ!!ほかならぬ同じ血筋の許婚者だと兄から聞いて心強く思っていたゆえ、大事な妹に危急の知らせを遣わせたのに、もう少しで殺されるところだったというのか。いまましい!今すぐにもでもコタンラへ怒鳴り込んで行って、こま切れに叩斬ってやりたいところだが、そうもいかぬ。奴がどう振る舞ったとて、交易から帰ってきた兄さまに言いつけたならば、ひどい死にざまをすることになるぞ」

と言ってあたしを抱きしめ、無事に帰ってきたことを言祝(ことほ)いでくださいました。

### 1.6 ニソシッチウエ神の女盗り事件

それから二三日たったある日の夕暮れ、はるか西のはてに爆発音がして神の到来する音が鳴り響きました。伴う神風にはたくさんの竜巻が先駆けし、このお館あたりを目指して来るらしく、たちまち山城に風がはためき、地面もゴウゴウと鳴り轟く。その音に、姉さまとあたしは顔を見合わせおびえていました。

やがて外やぐらの上に何者かの降下する音がドシンとしました。家のそばを通ると山城が揺りかごみたいに揺れて、それだけでも気味が悪い。

何者かは、玄関土間で身をかがめたりひねったりしながら、内土間へ入ってきました。まあ何とということでしょう。

そやつは、小山が手脚を生やしたような奴で、岩の鎧が脚先から手先まで蔽おおっていて、岩の胴かをい権いほどの刀が貫いています。顔なるものは崩れ落ちた崖のようで、鼻といえば、下り降りる山の峰をスパッと切りとってあの世の入口の洞穴が二つ並んでいるかのような、爪あとみたいな細い目をしている者でした。喉奥にゴボゴボこもり、口元でビリビリ響く声でこう言いました。

「これこれ。トミサンベチ・シヌタプカの神のごとき淑女たちよ。わが申すことをよく聞け。

わが村の名はニソシッチウエである。我が輩は神であって、天界にも人間界にも度胸や弁術において我が輩に適う者は一人もいない、唯一無二の勇者である。天界に我が輩の嫁にふさわしい女が一人もいないゆえ、人間界を観察したところ、汝ら二人が我が輩の目になかった。

いいあんばいに汝らあにじやの兄者は交易に出かけて留守だから、そのすきに女盗りにやって来たのであるよ。たとえ婚約者がいても、人間の男を夫にするより神と結婚するほうが得だぞ。二人とも連れて行きたいが、嫌ならどちらか一人を連れて行く。右座にいる淑女は人間だからその姿が見えるが、左座にいる淑女はまったくその姿が見えない。どうやらこちらの方が美人らしいから、さあ連れて行くぞ」

と言いながらあたしの体をじろじろ見つめました。声を聞くだけでゾッとする。姉さまは怒りの炎ほむらを顔に燃え上がらせ、

「これは呆れた! おっしゃることは解げせませぬぞ。天界には女神がたくさんいらっしゃるのに、人間であるわれら姉妹を嫁に欲しいというなら、兄の在宅中に申し込めばいいのに、留守を狙って泥棒犬のごとく女をかすめ盗ろうというわけだな。神のやりかたがそうだということか。

神というものは神々同士で結婚すべきものであろうのに、その格好も怖じ気をふるう極悪の化け物神が、生意気にもその言葉われらに通じて、嫁がほしいのだそう。見守る神々の目もおそれず、死にくたばりたくて、そんなことを言うのか」

と言いました。すると大魔神の笑い声らしきものが喉奥でウフウフウフと鳴り、

「我が輩が何か悪いことを言ったのか。このくされ女めが! たと言葉だけにしろ、とんでもないことを言うもんだな。嫌なら誰がお前なんぞ連れて行くもんか。こちらの淑女こそまさに我が輩にピッタリだ」

と言ってあたしに跳びかかり、あたしの片方の肩をむずとつかんで、戸口へノタノタ歩いて行きました。

あたしは驚きの声をふりしぼり、足をつっぱりました。姉さまは氣勢をあげて立ち上がり、あたしの胴をぎっちりつかまえました。二人が渾身の力でふんばると、そのでかぶつは上座の端っこまではね跳ばされました。そやつがふんばると、あたしが戸口まで引っ張られました。それを数十回も何百回もくり返しているうちに、とうとうあたしは疲れ果て、姉さまも精根尽き果て脂汗を浮かべています。

「ほんにまあ! 小娘二人の強いこと。汝らがあくまで我が輩の言葉にさからって、俺様めんつの面子をつぶすのであれば、二人とも決して生かしておかないぞ。ぶち殺してやるからな」

と極悪魔神は、言いながらハッハッと息を激しくついています。

あたしたちは何一つ悪いことをしていないのだから口惜しい。兄さまがいつもまつ祀っている神々が大勢いるのに、ただ一人の神さまも死の瀬戸際にいるあたしたちを助けに来てくれないのか! 二人の泣き叫ぶ声が響きわたりました。

あたかもその時、突然煙出し穴から、真っ赤な閃光たいまつが松明かさか月の暈のようにあたしの顔前でパッと明るく照り輝いた-と思った瞬間、ニソシッチ

ウェ神のちぎれた断片が左右へパッと散りました。国土や村里が崩れ落ちるさながらに、魂が体から離れて天に昇ろうとする音が鳴り響きます。

昇ろうとしたとたん、上から踏みつけられた音が、黄泉の国に沈んで行く途中で、この国土の痛みはずれに浮き出ようとするれば、誰かが上から踏みつける。しもはずれに浮き上がろうとしても、誰かが上から踏みつける。何十回何百回もそれを繰り返したあげく、とうとう極悪魔神の魂は六重の奈落の底、じめじめした黄泉の国へ蹴落とされ、そこへ沈んで行く音がゴボゴボゴボゴボ。たくさんの神々の死霊の音が引き返して来ては、また遠い黄泉の国へ沈んで行きました。

音が静まったあと空がパッと晴れ、地上も地下もひっそりして何の音も何の声もしない。

### 1.7 コタンラびとの弁明

そのうち急ぎ足の音が聞こえ、訪いの咳払いがコホンと聞こえました。入って来たのは、あなたのお腹を踏みつけて殺そうとした上、暴言を吐いて悔しがらせたコタンラの奴。

どうしたのか蒼白な顔にうす笑いを浮かべながら、あたしたちの後ろを通過して、上座の客席に座りました。座るやいなや、あたしたちの方をうかがい見て、

「これこれ。わが従妹たちよ。われの話をよく聞け。イレスユビの兄者は留守中のお館が気がかりだと言っていたが、本当にニソシッチウェの極悪神が来て、そなたたちをさらっていかうとした。さいわい俺がぶっ殺して黄泉の国へ踏みつけてやったから、兄者が帰国するまで、もう何もこわい物はないぞ」

とこう言ったのです。恭しく頭を下げて聞いていた姉さまは、パッと顔をあげ、

「アチカラタ、アヤカンナタ！ コタンラのつくきわが許婚者、最低の奴め。恥ずかしげもなく大ぼらをふいたものだわね。ブルブル震えながら隠れていたくせに、極悪神を自分がやっつけたなどと、見守る神々の眼前で、よくもそんな嘘をつけるものだ。

兄の言いつけどおり、ばあやの異変を知らせに妹を遣ったら、妹の腹をはげしく踏みつけた。さいわい強い憑き神に守られている妹だったから、すぐ生き返ったのだ。妹が死んでしまったら、帰国した兄さまに、どんな言い訳をするつもりだったのか。

たのか。

邪神に憑かれたばあやさえ死ぬほど怖がったそなたが、恐ろしい極悪神をどのようにして殺したのか。魔神と戦ったはずなのに疲れの色もない。兄が帰ってきたならば、わらわは、そなたの言動すべてを言いつけるつもりぞ。覚えておけ。

煙出し穴から真っ赤な閃光が光った瞬間、極悪のニソシッチウェ神が一刀のもとに斬り殺されたことを、わらわはよく存じておる。今こそわれらがいつも祀っている神が救いに来てくださったのがわかっているのだ」

と姉さまは気が違ったように怒り狂いました。あたしもさんざん罵倒してやったわ。

コタンラの奴は言い返すこともできない。自分の頭をかきかき、

「まったく俺が悪かった。おぼと戦って勝てるとは思えなかったので助けに来なかった。まことに悪かった。後悔している。しかし、極悪の神を殺したのは本当に俺なのだぞ」

とあやまりながらも、最後には

「うるさいわい。くされ従妹どもめが。遠慮なしによくもこうしゃべくるものだわい。男のはしくれ、族長のはしくれである俺さまだが、たった一人の魔神を殺せなかったからとて、あまりにも俺の霊力を軽んじていやしないか。兄者が帰郷したとき言いつけてやるからな」

と捨て台詞を吐いて外へ飛び出ていきました。

そのあと、「妹、わが命よ」「姉さま」と、あたしたちは抱き合い、撫で合い、手を取り合い、泣いて無事を喜び合いました。それから二人は炉ぶちの後ろをさんざん踏みつけて、コタンラの奴を罵ってやりました。ほんとにほんとに難儀で疲れた出来事だったわ。

あたしたちは毎日向かいあった席で、ばあやとコタンラの奴のことを話題にしながら、自分たちの針仕事をほめ合い、楽しくおしゃべりしながら暮らしていたところ、

### 1.8 兄の帰還

ある日のこと、兄さまの船荷を降ろす声が遠くから聞こえてきました。たちまち館のそばに兄さまの足音と鏗鳴りの音が響き渡り、一揃いの小行器を手を持った兄さまが、内土間に入ってきました。なつかしい挨拶のあと、あたしたちは異口同音に、留守中のできごとを、ことこまかく語

り終わりました。

兄さまは一日じゅう地面がグラグラ揺れているほど驚き、

「われらをねたむ者、ちょっかいを出す者ばかりがたくさんいるにしても、われがちょっと留守したあいだに、ばあやがそのように振る舞ったのか。コタンラのおとうと従弟もまったく意気地なしの弱虫であったのか。あとで痛い目にあわせてやるからな」

といきどお憤る声、割れるがごとし。兄さまは、あるときは笑い、またある所では炉ぶちの後ろをギューギュー踏みつけてちくしょうめと罵りながら聞いていましたが、聞き終わると

「よろし、よろし。ばあやの心変わりもしかたがない。ばあやがいたおかげで、皆そろってりっぱに成長できたのだから、この事件の結末は神におまかせしようぞ。それにしても、われらに祀られることを感謝している神々のうち、何神が妹たちを助けてくださったのか」

と言いました。

それから従僕たちに交易品-酒や米や上等な和菓子だの耳飾り首飾りやら絹物-を運ばせ、館内に山のように積み上げました。

何とまあ、あたしたちは喜んだことでしょうか。姉さまと二人でいくつもの冗談を交わしあっていると、あたしたちの両方へ兄さまは何度もうなずきながら、

「今日は疲れているから今晚はよく休み、あした早朝から山に入って新しい獲物が捕れたら、カムイノミしよう」

と言った後、和の国の立派な殿様と親密なつきあいをしたこととか見聞したことをすべて語って聞かせました。あたしは何と面白く聞いたことでしょうか。三人で楽しく歓談して寝ました。

## 第2章 遭難

### 2.1 熊神来訪

その翌日、東雲の朝しのめと闇の暁あかつきとが交代して夜が明け放たれる直前、あたしたちはとび起き、兄さまは二人の従僕を連れて山へ跳んで行きました。あたしたち二人はこの大館の内側から外側まですべて掃除し、新しい水も汲んできて、はや日暮れになりました。

従僕の一人が伝令として跳んで来て上座の窓か

らこう言いました。

「わがお仕えする殿がつかわした口上はこうであります。『鹿も熊もとることができたから、まず第一番に火の神にご報告し、そのあとでわが妹たちにも聞かせよ』」

あたしたちは顔を見あわせて喜びました。伝令は村の者たちに命じて、肉を背負う組や脂身を背負う組とともに山に跳んで引き返しました。

その後で姉さまはこう言いました。

「これこれ。わが妹よ。わらわが申し述べることをよく聞きなさい。召使いたちが集めた薪たきぎの中には質がよくないのもある。山の主である熊神さまがわが館に来訪されるのはまこと喜ばしいから、われら二人ですぐその村奥に行ってよい新しい薪を集め、それで煮炊きしたものを火の神や熊神さまに召し上がっていただければ、ただの淑女であったわれらの格は今以上に上がり、兄さまも大喜びなさるでしょう」

もっともだと思ったので、姉さまの言葉が終わらぬうちにあたしは立ち上がり身支度をととのえました。

### 2.2 異常な雪嵐

あたしたちが連れだって村奥へ行ったところ、突然ものすごい量の雪がドサドサ降り出してきて、たちまち道がわからなくなりました。あたしは姉さまの帯をぎっちり握って泣きながらさまよい歩きました。いつ夜が明けいつ日が暮れたのかもわかりません。とうとう着ている物もびっしょり濡れ、二人とも寒さでブルブル震えていました。

姉さまは、

「さあさあ妹よ、気を確かに持って、決して、わらわの手を放しちゃだめよ。すばらしい上天気だから出かけたのに、こんなにひどい天気になるなんて。わらわ一人で来たのなら死んでもかまわないが、わらわがよけいな提案したせいで妹といっしょに死なねばならぬ」

と泣きながらおっしゃったから、姉さまは邪心があつてあたしを誘ったわけでもないのに、今は二人一緒に<死>とかいうものを迎えようしている。口惜しいわ。あんなにも深い情愛で可愛がってくださった兄さまがお留守のときに異常な死に方をするなんて。

「兄さま、やーい」

あたしたちは絶叫しました。

雪嵐はどんどんひどくなってきます。あたしの意識は針のめどほどにうすれてきて、いつのまにか姉さまの帯も放してしまいました。姉さまが息も絶え絶えに

「わが命の妹よ！」

と呼びかける声がよき夢のように聞こえてきて、水流でうがたれた岸辺のまっ暗な穴に頭からつつこまれたみたいに、その後すっかり気を失ってしまいました。

とあって、物語は他の場所の別な語り手に変わります。

### 第3章 ルベットのムの人々

#### 3.1 シヌタプカへの思慕

わが父と母は、めったにない養育をわれにほどこして、平穩無事にわれらは暮らしていた。われは兄上や姉上と妹の四人兄弟姉妹で、今は皆揃って大きくなった。

わが館は壮麗で、渡来の行器やアイヌ造りの行器、渡来の筐やアイヌ造りの箱がうちまじった宝壇は光かがやき、壁にかかった首領の太刀もゆらゆら揺れて、あたり一帯に靈なる光りを放っている。宝壇の手前の台座の上でわれらは育てられていた。

父上や母上はどここの国にもいないほどの容姿であり、わが兄や姉妹もおとらぬ器量で、すべての者が濃くかげるもやに包まれていた。われも美男らしく、濃いもやに包まれ、周囲に靈光を放っていた。

父上はわれら兄弟に狩猟や漁猟を教えた。母上は姉妹に針仕事でも何でも女の仕事を教えた。兎や狐の小動物から始まった我ら兄弟の狩りも、今は熊や鹿を獲るようになった。姉妹も本当に針仕事が上手になって、母上を大いに満足させている。

季節ごとに家族全員で山の狩り小屋に行き、一ヶ月くらいずつ暮らした。冬は獣、秋は魚を捕り春も夏も同じように過ごし、母上はいろいろな野菜のませ煮を作って喜ばせてくれた。

われら兄弟姉妹はどんどん育ち、兄上はりっぱな髭も生えそろってもう一人前の青年姿になった。姉上も妹も入れ墨をして肌着の胸ひもを胸高にしめた一人前の娘姿になり、率先してたきぎとりや炊事仕事にいそしんでいた。

はるか遠いトミサンベチ・シヌタプカの若き城

主は、兄弟は自分ひとりで、二人の妹がいて、シヌタプカ殿の器量や弁舌と胆力は神界にも人間界にもかなう者はなく、姉妹の器量と手仕事の腕も人々の評判となって聞こえていた。われは、シヌタプカ殿に紳士としての親しみ、族長としての敬愛を感じていて、いつの日かこの勇者にお会いして、族長同士勇者同士として親戚同様親しくつきあいたいなあと思ひながら大きくなった。

ある日父上がこう言った。

「これこれ。わが息子たちよ。わしの話をよく聞きなさい。トミサンベチに住む天界まで評判が聞こえるたぐいまれなる勇者ポイヤウンベの父親は、人間のお方ではあったがその息子以上に数倍も国じゅうにその名が響いていた。そのために、妬まれ憎まれて、近隣遠在の者たちが連合軍を組んで敵対し、戦さばかりの苦しい生涯をおくったという。

わしは、先代シヌタプカ殿をまことお気の毒に思っていたから、いつかその戦さが、わがルベットのム村を通過する時あらば、戦ってはならぬと決めていた。できればシヌタプカ殿の戦場に馳せ参じて味方したいと思ったが、汝らは幼すぎて母親と四人の幼な児を置いていくのも心配でならぬ。それゆえ子育てに専念していた。

そのあいだに、シヌタプカ殿はまだ若いのに、人間界ではあまりにも難儀なことが多いのをイクスイ(立腹して去ること)して、夫婦で神の国へ帰って行ってしまったという。

一度でもシヌタプカ殿に会いたいと思っていたのに、亡くなったと聞いて惜しみ悼んでいたのがあったが、さいわいにも世継ぎがいて、トミサンベチの上流から下流まで統治しており、妹たちとともに大いに評判になっているようだ。

わが息子たち娘たちよ、決して邪心を持たず義にかなった行動をするのだよ。

人の頭に立つものは帝王学を会得し、人の言葉によく耳を傾けるものだ。

娘たちも母の教えを守り、よそから淑女の評判が聞こえてきても、決して嫉妬心や p.50 邪心をいだいてはならぬぞ。淑女というものは、よく人の意見を聞き入れ、いつも神に恥ずかしくない行いをしているならば、神が守ってくださるものなのだよ」

と言葉を駆使してさまざまな事柄をわれらに教

えた。それを聞いてなおさらシヌタブカの若殿に会いたくなかった。兄上や姉上、妹もみな同じように考えていた。

### 3.2 交易船

父上はこうも言った。

「わしが若い頃交易に行って、和人が飲む酒や米、菓子類を食べたものであったが、忙しさととりまぎれて、長いこと行かないうちにこんなに年をとってしまったわい。もう汝ら兄弟は交易に行ける年になった。さあ、和の国へくだってくれ。得てきた交易品で神祀りをしようぞ」

われと兄上は喜び勇んで熊皮や鹿皮などの交易品を船に積み込んだ。

父上は、宝壇の上にきらびやかに輝いている黄金のつづらを引っ張り出し、幾重にも重なっている箱の縛ってあるひもを次々とみなほどいて上蓋を払い落とした。

中から取り出したものは、金の小袖-衿の上にも裾の上にも幅広の平金がとりつけてあるもの-平金の間は、数々の金色の巴紋様たくさんの金色の曲線で飾ってある。ぜんまい飾りがぶら下がる金の帯には、神から降ろされた太刀が氷の色をなして鞘長にそりを打たせて下がって居り、鞘の上にはたくさんの神々の姿が彫りつけられていた。父上は黄金の兜もいっしょに出してきて、兄上に与えた。

次に父上を取り出したものは、驚くべし、館内がパッと明るく輝くほどの真っ赤な小袖で、衿や裾の上に、幅広の平金がとりつけてあり、平金の上はたくさんの金の紋様で飾られていた。その上一帯は血のように朱いもやが光を放っていた。真っ赤な帯にぶらさがって、深紅の太刀が反りをうち、神々の像が彫りつけられ鞘の上や兜の上一帯には靈光が輝いている。

これらのものをわれらに差し伸べ、父上が言った言葉はこうであった。

「これなる武具は天の神の国からルベットの山城に降ろされたものであるから、汝らが一人前になるまで、わしが預かっていたのである。これを身に着けて和の国へ行きなさい。」

かしこまりながらも喜んでわれらは受け取り、高く低く空中に差し入れて礼拝した。身に着けると、わが周囲に真っ赤なもやがたなびいた。両親や姉妹たちも恭しくわれの手前に目を伏せて直視

しない。兄上のまわりにも神々しい光が放射している。

それから二人の度胸ある若者だけに船に乗ってもらい、美しい帆かけ船の中央に小さな船室をこしらえ船室を美しく飾った。

兄上が舵とる櫂を握って水をかきまわしかき返すと、二人の若者がグイッと船をこぐ。たちまち船は大海原へ流れるように滑り出た。舳先にあたる波ザアザアザア。大海原はどこまでも平らかで、ゆらゆらと風ぐ海で魚を潜り捕る海鳥の鳴き声がたいそうにぎやかだ。

時には船室に入り、時には甲板に出て、われは大海原を観察する。あるときは、兄上と交代して舵とり櫂を握ったり、供の者と船を漕ぐ。なんと面白かったことだろう。

### 3.3 和人の国

それから人がいうところの和の国へ到着した。見て驚いた。どこまでも町並みがずらっと並んでいてかみ端も、しも端もかすかに見えるほど大きな町だ。

湾内には、いわゆる<和人>と呼ばれる者-頭の上にカラスのくちばしみたいなちょんまげをくっつけている大勢の人々が出迎えた。帆かけ船を砂浜へ着けてわれらの上陸を手伝い、わけのわからぬ言葉をしゃべりながら殿様のお屋敷にわれらの船荷全部を運び終えた。

それから、殿様のお屋敷に着いた。父上から聞いていたように、お屋敷は島みたい大きく壮麗でおおいに感心した。お屋敷に入って見ると、内部の調度品や飾りつけはそれこそ神のお住まいと見まがうほどだった。

年老いた殿様は金糸銀糸で刺繍した着物をかさね着していて、アイヌ語で語りかけた。われら二人の手をとって、その昔わが祖父たちや父上若いときに親しくつきあっていたことをていねいに語りながら旧交の挨拶を交わし、はらはらと大粒の涙を流した。外国の和人と呼ばれる者であっても、威風堂々と居並んで座っているさむらいたちも、まるで自分の同胞みたいに涙を浮かべている。皆、気持ちがいい人たちのようだから、族長のはしくれ、勇者のはしくれのわれではあったが、目尻から涙が滝のように流れ落ち、兄上も涙をぬぐっていた。

いちばん上等な熊皮を殿様へ献上し、それ以外

の毛皮はすべて交易品として提出した。それから連日引き留められ、殿様と同じものを飲んだり食べたりしながら楽しく過ごした。そして、酒や穀物でも何でも極上のものばかり、和菓子類や様々な女性の装飾品などを船にいっぱい持たされて出帆した。殿様とは離れがたくて、必ず再会しようと言いかわして涙ながらに別れた。

われら一同まことに陽気な気分であった。さあさ早くわれらの館に着いて、両親姉妹を喜ばせたいなあ!と思いながら帰国の途に着いた。

### 3.4 魔神とコタンラびと

帰路でわれは考えた。シヌタブカの若殿を陰ながら敬愛していたものの、いつまでもお目にかからなければちががあかない。旅の途中で申し訳ないのだが、シヌタブカ城の外観だけでも拝見し、その後で族長同士の平和な訪問をすればよいのではないかと。

それで日が暮れて沖人の海と陸人の海が接する場所を通ったときに、われは船室から忍び出て、甲板から音もなく天空に飛び上がった。数々の雲間を手がある鳥のように流れすべって陸に向かった。夜のうちに船を登ったのにもう夜が明けている。

噂に聞いていたトミサンベチ・シヌタブカの山城が、眼前に高々とせりあがってきた。上空で旋回して眺めていると、何の声であろうか。館の中で誰かが泣き叫ぶ声とドシンバタンという音がする。はて、変だぞ。鳥が木の枝に止まるさながらに煙出し窓に降りた。

ちょうどそのとき、横座の窓下に、もやに包まれた年若い青年が近寄ってきて、窓のすだれの裾に両膝ついて、すだれの編み目から室内をのぞいた。真っ青な顔で額の上がブルブルふるえている。

われも煙出し窓から室内をのぞいて見たところ、岩の鎧を着た容貌魁偉な怪物と二人の娘が何十回も何百回も引っ張り合いをしていた。青年は、それを肝をつぶして見ていたのであった。

娘たちは泣きながら「兄さま、やーい」と絶叫し、かわるがわる怪物に罵声を浴びせていた。

聞けば、シヌタブカの若殿が和の国に交易に出かけたその隙に、雲がわき出ずるニソシッチウエの大魔神が、シヌタブカ姉妹を嫁にしようと館にやって来た。妹姫の方がはるかに美しいから連れ帰ろうとしたので、姉姫がそうはさせじと妹姫

の引っ張り合いを魔神としているところなのであった。

なんと気の毒な。神は神同士で、魔神は魔神同士で結婚すべきものであろうのに、なぜか人間に惚れてしまったようだ。わが一族でなくても、今や絶体絶命の危機に立たされている姉妹が、いたましくてならない。われに狂おしい怒りの感情が吹き出し、煙出し窓の上から手元ピカリと光らせ、大魔神へ激しい太刀を振りとばした。急襲された魔神が振り向こうとしたとたん、ちぎれた骸が左右にパッと散り、死んだ魂が昇っていく音が轟々となる。

われは、すぐあとに続いてその魂を追いかけ、黄泉の国に踏みつけた。黄泉の国のかみはずれや、しもはずれから現れ出ようとすれば、われは急いで行って上から踏みつけた。何十回も何百回もくりかえしたあげく、とうとう大魔神は進退窮まり、この世へ出てくるのをあきらめて、真下の国、じめじめした黄泉の国へめり込んでいった。めり込んでいきながら、悪神の生霊いきりょうが体から離れ去って行く音、数々の神が死ぬ音がひきかえして来て、おびたしくゴボゴボと響き、音の後、湿った冥土の空はパッと晴れた。

ニソシッチウエの魔神が退治されたことについて、姉妹がどんなことを話すか聞きたくなったので、われはすぐ引き返し、煙出し窓の上に鳥が止まるさながらに音もなく降りた。

すると、窓外で震えながらのぞいていた例の青年が、たった今やって来たふりをして戸口で鏗なりの音をひびかせ、大股で館内に入って、炉の上座にどさりと座った。座るやいなや、

「われこそが、極悪大魔神をぶち殺し、ジメジメ湿った黄泉の国へ押し込めたのであるぞ。わが従兄あにイレスユビが帰国するまでは、恐ろしいことはもう何もないのであるよ」

と言ったところ、右座にいた姉姫がサッと頭をあげ、

「何をぬかすか。いやはやコタンラびと、わが許婚者よ。われらを見守る神の目の前で、恥ずかしげもなく大ぼらを吹いたものだわね。われらをあなどった悪たればあやがあのよう振る舞い、われらはあやうく殺されそうになった。ここで死にたくない。兄さまの言いつけに従い、わが妹に異変の知らせを持たせてやると、何が親切な男なも

のか。そなたは、可愛い妹のまだ幼いぼっこりとしたお腹を激しく踏みつけ、あやうく殺すところだった。罵声もあびせた。少女の尊厳を傷つけ、辱めを与えたことが口惜しい。兄さまがお戻りになったら、わらわが全部証言するからな。

極悪の大魔神にもう少しで殺されそうになったとき、煙出し窓で、真っ赤な閃光がきらめいたとたん、極悪の神が殺されて黄泉の国に踏みつけられる音がした。どこに大魔神をそなたが殺したのか。そこらへんに震えながら隠れていて、こうした有様を見たり聞いたりして、自分が殺したと言っているのだわ]

と言ったところ、コタンラびととかいう者は自分の頭をかきかき、

「まことをもって我が輩が悪かった。わがおぼがとんでもない事をしてかした時、薄情な態度をとったが、今我が輩が大魔神をぶち殺して、本当にそなたらを助けたのだよ。もう我が輩を許してくれ]

と言ったので、左座にいた妹姫が憤怒の言葉をパーととばした。

「アチカラタ!アヤカンナタ!コタンラの奴。兄さまが助けてもらえと言ったから、危急の知らせを持って行ったのに、極悪の大魔神を殺した男がまあ、ちっとも疲れの色を見せていないなんてひどい嘘つきだわ。首領ぶりも勇者ぶりもいいのに、いくじなさすぎて、隠れて家の中をのぞき見していたのでしょ。絶対そんな人間に助けられたのではない。いまこそ位の高き神が神の国から助けに来てくださったのよ。あんたがしたことをあたしは生涯忘れやしない。兄さまが帰って来たらみーんな言いつけてやるから]

「アチカラタ!アヤカンナタ!につくきいもうと従妹めらが!居てけつかって。勇者のはしくれ、族長のはしくれである我が輩に向かって、無遠慮に言いたいことを言うもんだわい。おぼの件で助けに来なかったせいで、ふてくされやがってそのように言うのか。汝らが何と言おうとも、極悪神をやつめた男は俺様なのだぞ]

と男は言ってパッと外に飛び出し、ただひとつ飛びにコタンラ村へ音を立てて行った。その音のあと空が一度に晴れた。

二人の娘は顔を見合わせて笑い、手をたたきながら口々に、

「ざまあみろ!コタンラのくされあに従兄に言葉だけであっても、ちょっぴり仕返しをしてやったから、ちょっとだけでもいい気味なこと]

と言って、炉ぶちの中ほどをバタバタ足で踏みながら二人とも笑いくずれ

「あんなに弱虫で臆病な者が、どこにまあ、魔神を殺したなんてねえ。何神がまあ、たいしたことがないわれらを助けてくださったのかしら? 知っていれば、たくさんたくさん祀ってあげることができるのに]

と残念がっている。

呆れてしまった。今見聞したことをもう一度振り返ってみる。聞けば、なんでもコタンラびとと称する男はシヌタブカの一族であって、シヌタブカの若殿から交易に出かけた留守中、二人姉妹の後見を頼まれた。兄が出かけた翌日、育ててくれたばあやが女系伝来の衣装を奪おうとして戦いになった。負けそうになったので妹姫がコタンラに異変を告げに行くと、腹を踏みつけられて殺されそうになった。そのことに二人は腹を立てていた。

おまけに恐ろしい大魔神がやって来て二人とも殺されかけ、兄上の名を絶叫しているところをわれが助けた。そこへコタンラびとが姿を現して自分が大魔神を殺したと言ったわけだ。コタンラびとが臆病で弱すぎることでさえ呆れたことなのに、嘘をついたことを一方では哀れみ、一方ではおかしくて心の中であざけり笑った。

姉妹を観察すると二人とも甲乙つけがたい美人ではあるが、妹姫の器量は姉姫よりはるかに優っている。

別れがたかったが、そろそろ兄上がわが故郷ルベツムに近づいた頃だと思ったから、われは静かに天空に飛び上がった。兄上の帆かけ船に追いつき、船室に飛び込んでずっと前から座っていたふりをしていた。

とうとうわが故郷に着いた。交易品を館に運び入れると、上座いっぱいになるほどの量であった。父上はわれらをほめそやし、母上や姉妹たちも大喜びで料理やシト燗を作り、兄上と父上はイナウ木幣を削った。われも削ってみたところ、父上は上出来だとほめてくれた。

酒宴の準備がととのったので、一族を招いて神祀りをした。たくさんの先祖にも供養をし終え

た。それからは毎日皆で歓談した。うまい酒を飲み、うまいものを食べながら、和人の殿様のことなどをたのしく語り合った。やがて同族すべてが本拠地に帰った後、二三日ほどわれらは館ですごした。

### 3.5 夢見

それから一家総出で、あまった御神酒や料理を背負って山の狩り小屋にやって来た。神祀りしていたところ、日暮れから突然吹雪いてきて激しいみぞれになり、夜通し風が吹きすさんだ。こんな恐ろしい悪天に出会ったことはないと言親は話して神に祈りを捧げていた。われは宝壇の手前の寝台で寝たが、天気がますますひどくなってくるので心の中ではおそれていた。兄姉妹たちも心配そうに寝た。

寝しなに、シヌタブカびとが帰還した後、姫たちは平穏に暮らしているかなあと考えはじめたら眠れない。姫君たちがずぬけた美貌なのはもちろんだが、二人の口達者ぶりが男をはるかに超えているのにはびっくりさせられた。あれこれ思いついていると、突然妹姫の姿が目先にちらついてきた。気持ちをそらそうとすればなおさらいけない。われは寝床の上でごろりごろり寝返りを打った。勇者であり族長のはしくれであるわれなのに、恋しさのあまり泣き死にしそうな気持ちになったところで、まさか眠るとは思わなかったのに眠ってしまった。

そのうちパッと目が開いた。上座の窓の簾を通して外の祭壇に立ててある幣ぬさの端から山に行く道に目をやり、どこまでも見ていたら、あんなにひどい空模様だったのにすっかり晴れ上がっている。

わが里川の中流から大きな熊の足跡がはるか遠い木原きわらの湿原まで続いていた。幼いころから父上おとうが獲って来た大熊をたくさん見たが、これほどでかい熊の足跡は見たこともない。大鍋のふたを大地にかぶせたみたいな大きさだ。その跡をずーと目でたどって行くと、川下の平地に蹴散らされた雪山があって、まわりに雪が飛び散っていた。そこに人間の姿らしいものが横たわっていたが、神々しい光きらめくもやの真ん中まで目先が届かない。そこから少し離れて蹴散らされた雪山のそばにも、小さなもやの丸い小山が伸びていたが、われの眼力ではもやの中心まで見えない。大熊の足跡もプツリ途絶えていた。-ここまで見たと

ころで、わが目の先がサッとふさがる。

われは目が覚めた。夢だったのだろうか? もうすっかり夜が明けていた。父上たちはまだいびきを長々とかいて眠っている。われが起きると、兄上もむっくり起きあがった。われが身支度をして煙出し窓を通り抜けると、兄上は戸口から外に出て、われらは天空に飛び上がった。

嵐はすっかりおさり、今は上天気でどこまでもくっきり見通せる。わが心もさわやかだ。あちこち眺めて見たら、夢だと思ったのに、ほんとうに大きな熊の足跡が川の中流から河畔の灌木林へと続いているのがはっきり見えた。驚いた。川下の平地に雪山がパッパッとはげしく飛び散っていて、小さなもやの丸い山が横たわっていた。そこからまた足跡が続いていて、川上の平地にまた同じような蹴散らされた雪山があった。そのそばに兄上おとうが鳥が木の枝に止まるかのように舞い降りた。

われは川下にいる者のかたわらに舞い降りた。もやの真ん中の姿を見るまでに長い間かかったが、もやの中にはあんなにも恋い焦がれていた女性が、びっしょり濡れた着物の凍死姿で横たわっていた。その体の上にとくさんの悼いたみの群雲むらくもが下へ垂れ曳いている。

はらわたがちぎれるほど驚いた。どうしたわけか伴の者もない。突然ひどい嵐に出あって道に迷って、ずいぶん遠くのわれらの獵場までたどり着き、とうとう凍死という異常な死に方をしたらしい。五臓六腑をかきむしられたようにせつない。涙がひとりでに流れてきた。兄上も凍りついたように呆然と突っ立っている。

父上や母上は神々の故事来歴譚をたくさん知っているから、みんなで助け合えば何とか蘇生させられるにちがいない。われは自分の帯を脱いで肌着を脱いだ。それから妹姫の帯を切りとって着物をぬがせた。あゝかわいそうに!若い娘の肌は白子のように真っ白でまばゆく輝いている。われの肌着を妹姫に着せ、姫の着物はすべて雪の中に埋めた。

姫の遺体を腹に抱きかかえてわれは天空に飛び上がった。見れば、兄上も姉姫を抱きかかえてわがうしろにすぐ続き、走る神気の先にわれらは軽々と吹き上げられた。里へ吹き下る風音が耳元にヒューヒューうなる。

### 3.6 魂呼び戻しの術

館に戻ると、父上たちは今起きたばかりで炉の埋火をかきたてていた。

われらは異口同音に、

「かくかくしかじかの夢を見たから山に行ってみたところ、この二人が熊神から掘り出された。そのおかげでせめて亡骸だけでも発見できたから、どうにかして蘇生させられないものであろうか」

と話して二人の遺体を左座に横たえた。

父上はフムと氣勢をあげて立ち上がり、宝壇から紐でゆわえてある筐を引っぱり出し、紐を次々とほどいて六枚重ねの上蓋をはねおとした。筐の中から黄金の中から掘り出されたような魂呼び戻しの呪術刀一対を取り出して、雄神の刀を姉姫の胸に入れ、雌神の刀を妹姫の胸に入れた。

「さあわが息子たちよ。あぐらを組んだ足の上に姫たちの頭をのせて神に頼みなさい」

と言いながら神に祈詞を述べ、母上と姉上は美しい着物のうちからさらに上等なものをよりわけて、姫たちの体にかけてあげた。それから兄上があぐらをかいた膝の上に姉姫の頭をのせ、妹姫の方はわれが膝枕させて、数々の神の根源を明かして神の加護を求めた。今はじめてわれは祈詞を唱えたが、われながら何と雄弁だったろう。同じようにまた兄上も何とまあ才知ゆたかであったろうか。

母上と姉上は薪を幾かかえも運びこみ、火をあかあかと燃やし立てた。

懸命に努力しているうちに姉妹はだんだんそのからだが暖かくなり血が通ってきた。次第次第に生者の顔色が戻ってきた。われらは喜んで、いっそう懸命に神助を乞う祈詞を唱え続けた。母上はゆるやかな踏舞でもって上半身を揺すり、呪文を唱えながら力足を踏んでいる。

これで二人の姫がうまく蘇生すべく手段と材料がそろった。

妹姫はわが顔にまともに向かって目をあけた。何をどう見たのか「アヤポ(きゃあ)!オヨヨ(いやあ)!」と言ってわれから這いずって遠ざかった。同様にして姉姫も身を深くかがめながら下座へ膝で進んで行った。

われはホッと安心して台座に落ち着いて座った。兄上は第一等の上席である横座に座った。

母上たちが二人の姫君の手をとりながら語りかけると、二人は聞きわけよく炉端まで出てきて、つつしみ深く髪の毛が床につくほど深々と頭を下げ、顔をあげる様子もない。

母上が薬湯を自ら煎じて姫たちに飲ませた。たくさん薬効ある気を飲み込んですっかり元気になった。姫たちの守り神が強かったからにちがいない。父上も強い憑き神を持っていたので、即刻神々が振り向いたにちがいない。われは心の底から神々に感謝した。

### 3.7 解き明かし

父上は炉の中ほどにある熾を手元に引き寄せ、手元の燃えさしを中ほどまで押しやり、ときどき灰の中を火箸で突き刺したり、すじをつけたりしながらこう言った。

「これこれ。姫御前たちよ。わが申し述べることをお聞ききくされ。わが村の名はルベツムであって、わしには息子二人娘二人がおります。

今やもう、われら夫婦は老いて足弱になったので、狩りも魚とりもできなくなったが、わが子たちはわれらをいたわって、ときどきは浜に、その合間には山に連れて行く。この場所はわしの若いころからよく獲物がとれたから、いつものんびり過ごししながら猟をする小屋なのです。

二三日前に、またわれらがやって来たところ、あまりにもひどい天気を薄気味悪く感じて神々が早く人間界に振り向くよう念じていたところ、あの恐ろしい悪天候が止むと同時に、息子二人がそなたたちを発見しました。

わしらみんなで力を合わせて神に祈り、お二人の命をお助けいたしました。神がおられなかったなら死んでしまった公算が大きかったのであるますが、幸い神に助けられたようでまこと喜ばしい。そなたたちの郷を名乗ってくだされば村まで送ってさしあげますぞ。なれど、見たところ平民ではなく身分の高い方の身内らしく思われるのに、従者も連れず、何ゆえわが猟場で凍死していたのか？」

父上がおだやかに尋ねたところ、たまげるほどきれいな姉姫が顔をあげ、つつしみ深く頭髪をかき分けると、顔の光りが館の中をサッと明るく照らした。美しい声で話す内容はこうであった。

「わたくしどもの村の名はトミサンベチ・シヌタプカと申しまして、兄がわれら姉妹を育てており

ました。もう皆一人前になって、和との交易から帰ってきた兄が、『これから獵に行つて新しい生きのいい獲物を供えて神祀りする』と言つて山に行つたところ、熊神を撃ち取つたとの伝令が、いち早く火の神さまに知らせようと先に山を降りて来ました。

位高き熊神さまを客人としてわが館に迎えることがとても嬉しかったから、召使いたちが集めておいた薪以上に、質のいい新しい薪を自分で拾い集めてそれで熊神さまの食事を作ってさしあげたなら、神々も兄もほめてくださるだろうと思ひました。妹をさそつてそれほど遠くもない村奥まで薪拾ひに出かけたところ、突然ものすごい雪の量がドサドサ降つて来て、引き返すこと進むことできない。わたくしの帯を妹が握つて吹雪の中をやみくもにさまよつているうち死んでしまったのです」

「なるほど。何か悪い神がお二人の魂を奪おうとして雪嵐を起こし、凍死させたのであつたか。熊神が獲られて体から魂が抜けたちょうどの時、悪天のため姫たちが道に迷つた。シヌタプカ殿には遭難場所がわからなかつたので、仕留めた熊神に頼んでみたところ、熊神が足跡でその場所まで導き、雪中から姫たちの体を掘り出しておいしてくれたおかげで、わが息子らが見つけたということがわかりました」

とあつて、話は他へとぶ。

### 3.8 再びシヌタプカ姫が語る

長い間眠つてたのか死んでたのか。誰やらの声や物音でときどき目覚めては、またうつらうつら夢心地になつていく。若い声で神へ祈る言葉がわんわんと響きわたり、女性の細く甲高い危急の叫び声が唱和しているところに、あたしは正気づきました。

目をパチパチさせていたら、まだ少年と言つていいほどの年若い青年-どこにいて今まで噂の端にもものぼらなかつたのでしょうか-が、ご自分のあぐらをかいた脚の上にあたしの頭をのせて、いくつもの神々根元起源をあきらかにして、呪文を唱えていらした。その方よりも年上の青年-なんともはやほめる言葉も見つからないほどの好男子-も、膝に姉さまの頭をのせて、神助を乞う祈詞を唱えているようでした。そこであたしたち二人同時にわれに返つたのです。

二人とも大変驚いたものだから、「アヤボ!」「オヨヨ!」と叫んで下座まで這いずつて行き、そこで手を取り合つて泣きかわしてました。あたしの体を見たら、以前着ていた着物はひとつもなくて、他の方の美しい上等な着物ばかりを襲ね着してました。肌着には男性の小袖を着ていて、襟元やすそから突きでている肌に靈光が輝いています。大事に隠していた肌を、とうとう神か人間かにすつかり見せてしまったにちがありません。恥ずかしくて、なおさらあたしは泣き続けました。

中年の女性なのか、きらめく光ともやのせいで見えにくいけれど、その方は泣きながらあたしの生還を祝つて下さいました。一族にちががなくそっくりな目つきと眉つきをした二人の若い女性-年上と思われる方は姉さまより年長で、年下の方はあたしより一年ほど年上らしい。手塩にかけて育てられた方々らしく、どこをとつても非常にすばらしい-も泣きながらあたしをなぐさめて下さいます。何とありがたかつたことでしょうか。

右座には、金襴の着物に金飾りの帯をして、兜をかぶつた初老の男性が、妻と並んで座つていました。妻女は薬草を煎じる小鍋を炉鉤ろかまにかけ、煎じた薬をあたしたちに飲ませたので、身のうちにぐんぐん生命力が満ちてきました。

この家上座の東隅には、よく吟味された少数の宝刀や宝器で飾られていて、山中の狩り小屋のように思われました。遠慮がちに、髪髪の毛のすきまからのぞくと、宝壇の手前にある台座には、膝の上にあたしの頭を乗せて呪文を唱えていた白面の青年が、濃いもやに身を包まれて座つていました。横座には姉さまを救う祈詞を述べた年上の方が座り、一カ所をじつと見つめていらつしやるご様子です。

しばらくすると、初老のお館やかたさまが村の名と家族全員で祈祷して助けた旨を話してから、あたしたちの村の名を尋ねました。姉さまがくわしく経緯を話し終えると、一同は自分の鼻や口を押さえて驚き、お館さまは助かつたわけを解き明かして下さいました。

姫君たちは心をこめて作った料理をあたしたちに捧げ、皆にも給仕しました。空腹のあまり死にそうだったあたしは喜んでいただきました。

そのあと、姉さまは遠慮がちにこう言いました。

「申し上げます。ルベットの尊き神のごときおじさまとご子息たちがいらしたおかげで、つまらないわたくしどもが生き返ることができました。まことに感謝し拝礼いたします。しかし兄が心配しているでしょうから、一刻も早くシヌタプカに帰らなければなりません。兄は大喜びで、皆さま方へ返礼することでありましょう」

ルベットの館さまは、姉さまの言葉が言い終わらぬ先に了解の咳払いをして、

「ごもつともごもつとも。ならば即刻お戻りなされ。いずれ必ず再会するでありますようからな」

と何度も深くうなずきました。

あたしたちが喜んで立ち上がると、ルベットの奥方と姫君たちはあたしたちを撫でさすり、両手を握ってはなさない。あたしたちも泣きながら、絶対にまたやっ来て、これからは一族同様に親しくつきあいますと誓ったら、三人は涙の中から目をあげ、ほほえみました。

後ろをそっと振り返ると、上座にいる青年は寂しそうな悲しみの色を顔に浮かべています。あたしたちも心が悲しみに死んでしまいそう。宝壇の手前にいる青年は、濃いもやに包まれていてどんなご様子なのかあたしには判りませんでした。

あたしたちが狩り小屋の外へ出て行くと、姫ごみたちは戸外まで出てきて見送ってくださいました。

それから天空高くあたしたちは飛び上がりました。天空をかける音が耳でヒュウヒュウ鳴っています。

## 第4章 再びシヌタプカへ

### 4.1 熊神が夢で兄に語る

やがてトミサムベチ・シヌタプカの頂<sup>いただき</sup>が天空にそびえてきました。外櫓から飛び降りて館に駆け込みました。

ああお気の毒に!兄さまは、心配のあまり蒼白な顔色で、右座から炉火をじっと見つめていましたが、物音をいぶかしがって戸口へふり向くと、体がパッとほじけました。あたしたち二人は

「兄さま!」

と叫びながら兄さまの腕の中に飛び込み、これまでの出来事を細部までいねいに、一言もあまざず全部話しました。

兄さまはフムという声とともに、ご自分の鼻や口をおさえて驚きました。それから「妹よ、わが命よ!」と言ってあたしたちを抱きよせ、あたしたちの体に涙を雨のように降りそそぎました。

「ああ、目先のことしか見えない霊力も呪力も無いわれであったゆえ、こんなこともわからずにいたとは!妹たちは、もはや運をみはなされて凍死したばかり思いこんでいた。亡骸すら発見して生き返らせることもできなかった。男兄弟はいないので、唯一の身内だった者すべてが死に絶えたら、何を生き甲斐にして生きて行くのか。そうなったら自殺してしまおうとばかり考えていた。

われが山で熊を獲ったせいでこうなったのだから、熊神にもこう祈った。

『大勢の人々に四方の獵場を捜してもらっても妹たちの行方はまったくわかりませんでした。山の主神が何かわけあって自分を祀ってもらうために、わが妹たちの薪とりに巡りあわせて突然あのような悪天候を勃発させたのか。いま山の獵場でわが妹たちの体を朽ち果てさせたならば、熊神が大恥をかき面子がつぶれることになるのであります。いざいざ山を領する神よ。一刻も早くわが妹たちの亡骸がある場所を夢でも教えてください。そうでなければ、いつまでもあなた様の魂を天に送る祀りができないのでございますぞ』

すると、ゆうべ熊神が夢に現れてこう言った。

『神というものは、急には人間界に振り向くものではないからのう。わしは、たった今人間界を遊行し終えた。わしは年老いた。それゆえ天にもどって来る前に、人間が作った木幣や御神酒を土産にもらって昇天したい。天の国でこれほど神々が喜び愉しむものはないのだから、ただの名も無き男に祀ってもらうわけにはいかない。トミサムベチ・シヌタプカにたどり着いた時にひどい雪嵐に出っくわした。

この大吹雪は、雲がわき出るニソシッチウの奥にいる極悪の魔神ニソシッチウエの仕業であることを、わしは術で見通した。

ニソシッチウエは汝の妹たちを妻にしようとして、汝の留守中シヌタプカの館に入り込み、あやうく妹たちを殺すところだった。神罰にあたいする行為であったから、大魔神は殺されて黄泉の国に閉じこめられた。

大魔神を退治できる者は滅多にいない。大魔神

は不意打ちで殺され、六重の奈落の底に落とされたものだから、悔しくてたまらない。それで汝の妹たちが、山で獲られたわしや神々や汝を喜ばせようとして薪ひろいに出かけたとき雪嵐にして、二人が凍死したら、まんまと魂を奪って妻にしようとしたのだ。霊力の弱い人間は皆大吹雪がわしの仕業であると思っていたが、事實はこうであった。わしは怒って、何度も大魔神に懲罰を与え、人間界を振り向くことをできなくさせた。

汝の妹たちは凍死したが、わけあって他の国の人々に生き返らせてくれるよう、わしを取りはからった。そのわけとは後々、神の御前で汝はわかるであろうぞ』

と。ニソシツウエが魔神の呪術で出現させた雪嵐を、位高き熊神のせいだと遠慮もなく申し立てたのだが、熊神のおかげで何ごともよきように運んだこと、まことに感謝いたします。拝礼つかまつりまする」

と兄さまは言いました。

見れば、おどろいた！ たまげた！ 人が言うところの熊神さまとは、もっと小さなものかと思っていたら、熊神さまの頭はそれこそ小山のようです。熊神さまの皮衣のおもてはピカピカ光り、大きくたたんである皮衣の上にこの頭骨が安置されていました。何とまあ、みっしりと肉がついていたでしょうか。脂肉や自身おんまゑが神窓の内側に山のような列になってぎっしりつまっているようです。

兄さまはあたしたちに槍で突くまねをし刀で斬るまねをして無事を祝うケウフムシュの儀式をしました。

それから非常に喜びながら熊神の頭骨に振り向き、手を高々とささげつつ、幾度も手を押しもんで、何十回も拝礼を重ねました。一方では神にあやまり、一方では何度もいちように神に感謝してこう言いました。

「どんなどんな容貌の方がこのルベットの神雄たちであるのか、これまでの生涯数々の噂や名声が神々の評判になっていることを聞いておりましたから、陰ながら紳士として親しみ、族長として敬愛しておりましたので、一人前になったならば、紳士たるルベットの族長のもとへ訪問して、いつまでも親密につきあいたいなあといつ考えて大きくなりました。

自分一人だけでそう思っていたのでありました

が、今回はわが妹たちが、あやうく極悪大魔神にめでたき運をのろわれて死んでしまったところ、ルベットの神雄たちが、家族そろって気高き心の持ち主で、神への祈詞や作法に堪能であったおかげで、神々とともに命を救ってくださったということでもあります。

そのようならば、今これから、ルベットの神のごとき方々のご家族とわがシヌタブカの者が一族になったならば、まことよろしきことでありましょう。」

兄さまは、あたしの考えと同じ事を数々の立派な詞でおっしゃったから、ほんとに嬉しい。姉さまもほんとうに喜んでいてみたい。

兄さまが

「さあさあ、妹たちよ。熊神さまが空腹であろうから、うまき飯を炊き、熊神に捧げなさい」

とおっしゃったから、言葉の先にあたしたちは立ち上がり、助け合っておいしいものを炊いて、位高き熊神に捧げました。

#### 4.2 熊送りの準備

兄さまはまたこう言いました。

「あまりにも喜ばしくありがたいから、あと二三日熊神をお待たせして、いささかの御神酒を醸して、ルベットの方々をお招きし、熊神の御前で、できうるかぎりの感謝をささげようぞ。

妹たちよ、貯えた食糧の余りでもあれば、倉から出して酒を造りなさい。」

とおっしゃったから、何とまあ、嬉しかったことでしょうか。聞き終わらぬさきに、あたしたちは外に走り出て、六本縄がかかった大かますを倉から運び出し、村のかみ端からしも端まで大声で酒を造る旨通告しました。同族のおもだった家の主人たちや選り抜きの婦人たちが館にやって来て、水を汲むものは汲み、穀物を搗く者は搗く。木幣にする木を伐る者はその木を伐り、煮炊きする者は煮炊きするなど協同して働きました。しばらくすると、酒を醸す六つの行器が上座にすえられました。

やがて夜になると、姉さまとため息をつきながら、

「雪の中から助けられたとき、神のごときルベットの兄弟に隠していた肌をお見せしてしまったことを思い出すと恥ずかしくてならないわ」

とささやき交わしていました。

あたしの婚約者イヨチビとはどんな顔のどんな人なのか、あのろくでなしのばあやがそこへ行ったのであったが、ばあやを嫁にするのを拒んだのであるのならば、自分ひとりの決断でちょっとでも来てあたしたちは会うこともできる。そうでなければ何か便りでも寄こしそうなのに、今にいたるまで何の知らせもないのだから、イヨチビとは悪いよからぬ精神の持ち主で、あたしを嫁として不満に思っていることがよくわかったから、腹が立ちました。

姉さまの婚約者コタンラビとがあたしの腹を踏みつけた上に、ニソシツウエの魔神にかどわかされそうになったときのふるまいを思い出せば、ほんとうに腹立たしさを覚えます。

同族であると称するものが薄情なひどいことをしたのに、ルベットのムの人々があたしたちの蘇生に尽力(じんりょく)してくれたことを思い出すと、熱い涙がポロポロ流れおちます。あたしを蘇生させたお方の顔とまともに向きあって目をあきましたが、若君がどんな顔立ちなのか、あたしはあまりにも驚いてしまってお姿も見なかった。光を放つもやのせいで見えにくかったのです。それなのにルベットのム弟君があたしの眼前にちらついて何をすることも出来ない。

弟君が肌につけていた着物を相変わらず肌着としてあたしは着ています。どんな男と呼ばれる方の着物がこれなのかしら。神の着物をしのぐほどの小袖に、ただわが身をこすりつけるだけ。兄さまは「これからは一族としてつきあうつもりだ」とおっしゃった。ああ早くお会いしたいと、そのことばかり待ち望んで眠ることさえできない。姉さまもあたしと同じ思いらしく、寝床であちらへこちらへと寝返りをうっています。

やがて二三日たつと、神が召し上がりたいものが酒だから、うまき酒の香りが館じゅうにただよい始めました。そこでまた親族たちがたくさん集まり、一同で酒を漉しました。酒を漉す者は一緒に箆を前後に揺すって漉し、酒を漉す音と削り花を削る音がサラサラ合奏すて、まったく好ましい。桑づくりや料理づくりにも皆は忙しく立ち働きました。お館はただでさえ美しいのに、さらに新しい木幣で飾りつけられ、家じゅうに白い霞がただよっているみたいに明るくなりました。酒宴の準備がりっぱにととのいました。

正装した兄さまは、今ある美しいという言葉では不十分なほど美しいご様子です。あたしたちも新しい刺繍衣を襲ね着し、絹の帯を締めました。美しい首飾りを首につけ、神々しい耳輪を耳元につけ、美しい鉢巻きで髪の毛を押さえました。まあ驚いた。自分ながらあたしは美しいらしく、濃いもやに包まれ周囲に後光が差しています。姉さまもまったく同じように神の如き美しいお姿でいらっしゃる。

#### 4.3 招かれた客たち

兄さまが、まず最初に、まことの雄弁家ルベットのム城主に遣わした口上はこうでありました。

「申し上げます。ルベットのムの人、尊きわがおじ御殿よ。わが申し述ぶることを聞いてください。

幼きころより、族長としての噂や勇者としての名声を聞いておりました、親族も兄弟もいないわれでありましたから、族長としての親しみ、紳士としての敬愛を覚えておりましたので、一人前になったならば、平和な訪問を試みたいと一筋に思いながら暮らしておりました。先祖代々人々から嫉まれているわれらゆえ、魔の神に呪い殺された妹たちを、尊きルベットのムの方々が魂呼び戻しの祈祷でもって蘇生させてくださったこと、重ね重ね心から感謝し拝礼いたします。

世に二つとないわが宝物すべてを、ルベットのムの方々にお礼として差し上げても少しも惜しくはありません。たった二人きりの妹たちが生きていることほど大事なことはないであります。

返礼するにいたしましても、その前に、山の神である熊神さまもいっしょに大変苦勞してご協力なされたからこそ、妹たちの屍しかばねをご兄弟が最初に発見したのであります。位高き熊神の魂送りたまおくりをするために、今からいささかの酒を醸して、今夜神を祀って魂送りしたく存じますので、尊きわがおじ御夫妻とご子息や娘御ともどもそろって遠くでもないところですから、シヌタプカにご来訪くださいまして、最初の杯を受け取ってください給え」

伝令は兄の言葉が終わらぬうちに承知の返事をし、ルベットのムへ駆け行く音がゴウゴウと鳴り響きました。

そのうちわが同族、より抜きの紳士より抜きの淑女たちが晴れ姿で続々と参入して来ました。

姉さまの婚約者であるコタンラビとも、左座に

座りました。なぜか、首を深くうなだれ、一カ所だけにじっと顔を向けていたけれど、怒っていた兄さまは知らん顔して目を向けようとしません。いい気味だったわ。

やがてルベツトムから伝令が戻ってきて、返事の口上を述べました。

「まことにご丁寧なお詞をたくさん聞かされ、ありがたきお言葉ばかりでかえって痛み入りますのに、その上さらに、つまらなきわれらをシヌタブカのお館にお招きいただくとの口上。重ね重ねありがたきことなれど、もはやわれら夫婦は、足許も覚束ない年寄りになりました。それゆえ、おそれながら申し上げますれば、われら夫婦はおそばに行くこともままなりません、わが息子たち娘たちが参上つかまつります」

伝令が話している間に、遠い国の山の上で爆発音がして、招待された人々のやって来る音がゴウゴウと響いてきました。あたしたちの城を一直線に目指しているものだから、たちまち伴う神風、山城に吹きつける風ハタハタと鳴り、地面に吹きすさぶ風ドッドドド。

外やぐらの上に次々と降り立ち、館のそばに足音がして、鎧や武具が触れあう音、首飾りや耳輪の触れあう音とともに玄関口に入ってきました。戸口で鎧の縁を打つ音が次々と美しく鳴りました。

まず入ってきたのは、ルベツトム兄弟の兄君のほう。正装の晴れ着姿で、ますますもって何ともかんと褒める言葉も見つからないほどの男ぶり。でも何かご病気だったのかしら。わずかの間見なかっただけなのに、毎日食事をしていないのか、顔色もしおたれています。

その背後に霞の丸い小山がすぐ続きました。まあ驚いた。血のような朱色のもやの中に稲光がピカピカッと閃きます。右座にいる兄さまの下座側に、あたしたち二人は髪の毛の裾が床につくほど深く頭を下げていました。兄さまも大勢の方々、男の方も女の方も非常におそれ敬っているものだから、平身低頭深々と頭を垂れ、あたり一帯シーンとして何の声も何の音もしない。

髪の毛の隙間から、長い間かかってもやの真ん中を見ると、まあ驚いた。兄君の男っぷりにも感心したけれど、その何倍も数倍も優れた白面の貴公子です。はじめて見たときはあまりよく見えなかったから、これほどの美男だとは思わなかった

わ。何もかも真っ赤な衣装と武具を身につけて、お気の毒に、兄君と同じく何の病か顔色がすぐれない。にもかかわらず勇者の面ざしが顔色に出て凜として強そうです。

二人は上座に隣あって座り、館の中を顔あげて見回すことも控えて、深々と頭を垂れました。

#### 4.4 明かされた真実

兄さまが手を高く差し上げ、お二人に向かって、始めからこまごまと挨拶と謝辞を述べ、フムという気合いの声をあげながら言挙げしました。返礼としてルベツトムの兄君が会釈の辞を、諸般にわたり条理をつくして申し立てました。なんと聡明な弁術だったでしょう。

次に弟君の言挙げが、カッコウ鳥の声のように響きわたりました。あたしの兄さまがルベツトムの方々にしほみを覚えていたと同じく、弟君も物心ついてからずっとシヌタブカの城主である兄さまを敬慕していて、一人前になったら平和な訪問をしようと思っていたことだの、ルベツトム城主の父君から聞かされた話でなおさらトミサンベチ・シヌタブカを好ましく思っていたところ-

「交易から帰る途中、館を一目でも拝見したくなってシヌタブカの上空まで来たとき、館内部から何かあわてふためく声がしましたゆえ、おそれ多いことでありましたが、降りて煙出し窓から覗いて見たところ、ニソシツウエの極悪神がお館に侵入して姫君たちが進退窮まる寸前でありました。

姫たちを助けなければと思ひまして、われがニソシツウエを斬り殺して、湿った黄泉の国へ沈めてやったのに、大魔神なる故、どこまでも邪悪な神力でもって悪天候を出現させ、姫君たちを凍死させたのでありました。われら兄弟が姫たちの亡骸を発見できたのは、山を支配する熊神のおかげであります。われらだけでは見つけられたかどうか」

というようなことを明瞭に申し述べました。何てさわやかな弁論だったことかしら。

そういえば、煙出し窓から真っ赤な閃光と月の暈みみたいな霊光がサッと光ったとたん、ニソシツウエの大魔神が一刀の許に斬り殺されたのをあたしは見たのだったわ。今の今まで兄さまが毎日礼拝している祭祀神のうちのどの神かに助けられたのだとばかり思っていたら、事実はルベツト

ムの弟君だったのね。弟君はこの時からあたしを知っていたのに、今まで何も言わずにいらした。恥ずかしい気持ちと感謝する気持ちが同時にわいてきました。姉さまも驚いて、こっそりあたしの着物を引き引き、体を突つき突つきしています。

兄さまも、驚くべき内容を知って、再び弟君に幾十回となく拝礼を重ねました。

#### 4.5 コタンラびとへの懲罰

兄さまは、向こう側の座でコタンラびとが自分を仰ぎ見ている姿を見て、こんな罵声を浴びせました。

「アチカラタ!アヤカンナタ!コタンラびと、わがろくでもない従弟、最低の奴め。臆病なのか根性が悪いかしやがって、そなたに後事を託して交易に出かけたのに、なにゆえ、危急を知らせに来たわが下の妹の腹を踏み、大恥をかかせたのだ?その上、神々の目の前で、ウウエソツチウエの大魔神を退治したと大嘘をついたそうだな?さあ見よ!さあ聞け!今ここで、細切れに切り刻んでやろうぞ」

と言って刀の鞘をパッとうちはらいました。するとルベツトムびとがこう言いました。

「よろし、よろし。シヌタプカの神勇よ、そこまですておきなされ。めったにあるわけでもない御神酒を酌み交わして、せっかく神々とともに愉しもうとしているその矢先に、人斬りをしたならば、貴殿のよき酒が悪しき血汐酒のようになってしまいますぞ。

シヌタプカ殿よ。お腹立ちではありませんが、今は何事も無事よきよう終息したゆえ、これもすべて神のご意志なのであります。これらの子細があったからこそ、今これからわれらが一族となれるのでありますから、まことわれらは喜んでおるのです」

と言葉を駆使してなだめ諭し、兄さまの手を握りしめました。兄さまは

「もっともである」

と言って、刀を鞘に収めようとしたその瞬間、飛鳥のごとく刀を振りあげて、兜ごとコタンラびとの眉間を切り裂きました。体の前後に血が谷川の滝のように流れ落ちます。

コタンラの奴は、避けようともせず、うつむいて身じろぎもせず座っていたので、あんなにも憎らしく思っていた奴であったけれど、満座の中で恥をかかされたわけだから、それも可哀想な気が

して、すぐにあたしの目元がうるんで涙が流れてきました。

さっきから、誰かが敷居をまたいで入ってきて内土間に座っていたのに、勇士たちが重々しく話し合う様子が聞きたくて、あたしは振り向くひまもなかったのです。たった今見てみると、ああ!晴れ着を着たルベツトムの姫君たちが、お持ち帰り用のふるまい酒を入れる大きな小行器ボシトコを手に、つつしみ深く髪の毛の裾が床につくほど深々と頭を下げていました。姉さまとあたしはサッと立ち上がって、姫君たちの手を引いて右座へ案内しようとすると、かたく拒んでかしまっています。むりやり右座がわまで連れてきて、「姉姫さまあ!」と叫んで、あたしたちは姫君の腕の中に飛び込みました。そうすると心がすぐにやわらいだのか、「いもうとよ、あたしの命!」と言って、あたしたちの頭に手をのばし、肩から腕にかけて撫で、手をとって撫でさすり、泣き合う挨拶じよれいの女札を交わしました。

兄さまは手を高くさしあげて二人の姫君に拝礼し、その上であたしたちが助けられたことを、ていねいな言葉で感謝しました。二人の姫君は、うつむいたまま聞いていて、兄さまが話し終わる前に鼻の下に右手人差指を当ててそっと右へ引く、感謝の女札をしました。

ルベツトムの若殿たちは、熊神のあまりにも大きい姿に驚き合いながら、何十回も何百回も拝礼を重ねました。

#### 4.6 熊送りの宴

そのあと、ようやく参列者たちがそれぞれ向かい合って座りました。ルベツトムの弟君は主賓として行器の後ろの席に案内され、主人役であるあたしの兄さまと向かい合って座りました。ルベツトムの兄君が弟君の隣席に案内されて、コタンラびとと対座しました。

姉さまは、酒宴のあいだをあちこち御神酒をついでまわっています。長い宴席がずうっと連なり、男の方々は遠くの神々近くの神々に杯や木幣を捧げました。

そのあいだに、ルベツトムの二人の姫君はあたしたちを手伝っておいしい煮物を炊き熊神さまに捧げました。

それから主だった家の女性たち大勢の踊ったり謡ったりする声がにぎやかに起こりました。

今はじめて酒宴というものをあたしは見て、なんと嬉しかったことか。ほんとうに嬉しい。御神酒もなんとおいしかったことか。酒糟さけかすをたくさんいただいているうちに、もう熊神さまの魂を天に送り還かえす時になりました。

それで主だった女性たちが上座で踊り、あたしも加わりました。あたしが踊ると一人だけ異った鳥のように異彩を放って、宴席のかみ端からしも端まで霊光がピッカピッカさしました。それと同時に、宴席のかみ手やしも手で、一族の長たちがいっせいにフムツという氣勢の声やヘツという雄叫おたけびをあげました。そして熊神さまの魂を立派に送り終え、あたしたちは安心しました。

それからまたもや御神酒を酌み交わし、あたしが歌や踊りの音頭をとって遊びました。

その間ルベットの兄弟を横目でうかがったところ、ときどきは気遣きづかわしげな色を顔面かおもにただよわせながら、姉さまとあたしたち二人だけを見つめていたから、あたしたちも陰でこっそり泣いていました。

#### 4.7 縁結び

宴もたけなわになってきました。兄さまが杯を高く持ち上げてあたしを呼んだので、あたしはつつしみ深くひざまずき、身をかがめ這うようにして兄さまの前に進んで行きました。大きな杯には上に渡している酒箸が漂うほどなみなみと酒が入っています。あたしは受け取って、少し口をつけてから飲みさしの盃を兄さまに返しました。

兄さまはその杯を撫でてあたしをねぎらいながら、

「これこれ。わが下の妹よ、わが申し述べることをしっかり聞きなさい。遺言によって許婚者がいる身のそなたゆえ、ここまで大きくなる間にふさわしい教えを授けてきたが、そのなかばにあのような経緯があって、ルベットの若殿である神勇が、ただならぬ死に遭遇した少女のそなたを生き返してくださった。まことにわれは感謝しており、返礼として何をさしあげたらいいのか、世に二つとないわが宝物すべてを差し出してもまだまだ足りないくらいだ。

若者の気持ちというのはそのようなものゆえ、ルベットの弟君がそなたを想って心を悩ませているのをわれは見抜いている。

今回の出来事すべては、親戚も身内もないわれ

らに親戚や身内を与えようとする神慮しんりよなのだ。もうこれからはルベットの弟君を自分から離れたところに行かせたくない。それゆえ、わが宝物を何でも均等に分けてそなたの嫁入り道具として持たせるから、若殿に食事をつくって暮らさない。弟君だからわが館のすぐそばに別邸を建てて住んでも、ルベットの尊きおじ御夫妻ごごも拒みはなさないであろう。

族長たちよ、これなるとり決め、いかがであろうか。

わが妹よ、身分高き女性のマナーやモラルをよく守って立派に暮らさない

あんなにもあたしが望んでいたことです。本当かしら?心の中で何とまあ喜んだことでしょう。横目でこっそりルベットの弟君を見ると、弟君は、体が弾はじけたみたいに腰をグイッと深く折り曲げ、何回も何回も拝礼を重ねて嫁取りの拝礼をしてから、

「まことなのか?器量のない美男でもないわれは、シヌタプカ殿の妹御を妻にしたいけども、言い出す勇気がなく、遠慮して生唾を飲み込みながらおりましたところ、幸いなるかな、シヌタプカ殿の返礼とはこのようなことであつたのか」

とおっしゃったから、兄さまも大いに喜び、冗談を言いながら杯の上を撫でました。兄さまはあたしの気持ちを見通していたみたい。ルベットの弟君も男であるゆえあたしへの想いを声に出しておっしゃったのでした。

兄さまは、さらにまた杯を高くさしあげてイコシクプマツである姉さまを呼び、杯を撫でさすりながら、

「遺言にあつたことゆえ、コタンラびとであるわが従弟おとうとの、親同士が定めた婚約者として、そなたを大切に育てが、奴はあまりにも情けない。今となつては遺言にそむいて婚約を破棄しても文句を言えまい。

そなたは、ルベットの兄弟の兄君のおかげでこの世に再生できた。おかげでわれもそなたにこの世で再会できた。すべては神々のご意志なのだから、そなたの嫁入り道具をたくさん持たせてやるから、兄君と結婚して食事をつくって差し上げるのだぞ。身分高き女性の品行を守り、いつまでもきれいな心を持ち続けるのだぞ」

とおっしゃったから、姉さまもあたしも大喜び

です。ルベットの兄君は腰を深くかがめて嫁受けの拝礼をし、ルベットの姫さまたちもまことに喜んで、いくつものおかしげな冗談を交わしています。コタンラビとを見ると、ひどく後悔しているものだから首から上が消えたように深くうなだれていました。それを見たら、あたしはすぐ哀れを覚え、あんなにも腹を立て恨んでいたのに、心がせつなくなってきました。

今度は、ルベットの弟君が杯を高く掲げて妹姫に呼びかけました。妹姫が進み出て杯を受け取ると、

「われらすべてよき精神をもって祖先の教えを守ってきた。それゆえ神が守ってくださって、このように主賓として迎えられた。そのことだけでもわれは感謝しているのであるが、その上、われらと義兄弟姉妹になる裁定をしてくださった。

だがお返しに何もない。そこであまり美人でもないそなたではあるが、シヌタブカ殿と結婚しなさい。よく淑女の品行を守って暮らすのであるぞ」

とおっしゃったから、兄さまは喜んで嫁取りの拝礼をしました。妹姫さまも、心の中でひそかにニコニコしています。

ルベットの弟君は再び杯を高く持ち上げ姉姫を呼びました。姉姫さまが杯を受け取ると、

「いろいろな出来事はすべてめでたく解決した。それほどの美人でもないそなたではあるが、コタンラ殿と結婚してあるべき人や神への作法をよく守って暮らさなさい」

と言いました。姉姫喜びました。先ほどあんなに哀れに感じたコタンラビとが、今は神の加護により、過分にも最高の美人と結婚することになったから、もう大丈夫。今こそようやくあたしの怒りもおさまりました。コタンラビとは、一日じゅう地震が続いたほど驚いたものの、かしこまって腰をサッと曲げ嫁取りの拝礼をしました。

あたしの兄さまもふたたび手を高くさしあげ、何十回も拝礼を重ねてから、

「まことにまあ、ルベットの裁量は何とお見事であることか。これまでは、嫉まれ邪魔されることばかりの半生であったが、まことに神のご配慮で何事もよきよう収まったことありがたや」

と感謝の言葉を述べました。ルベットの方々も、かわるがわるよき言葉をもって感謝し、一件

落着。シヌタブカの一族は男性も女性もこれらの裁定をほめそやしました。

そのあと、兄さまはほんとに嬉しいものだから、酔えば謡う酒歌を美しく響かせて謡いました。相次いでルベットの酒歌が神々の声のように美しく響き、コタンラビとも心から喜んで酒歌を謡いました。ルベットの兄弟はそれぞれあたしにお流れをくださいました。

ルベットの妹姫さまとあたしの兄さま、コタンラビととルベットの姉姫さま、ルベットの兄君さまとあたしの姉さま-皆それぞれお似合いのカップルです。でも満座のなかで、ルベットの弟君が、風貌も服装も断然優っていました。

ルベットの兄弟は入れかわり立ちかわり横座で立ち上がり何度もかわるがわる踏舞を舞い、その後ろについて女性陣の踊りが続きました。酒宴のかみても、しもても家長たち族長たちがいつせいにヘイッ！ヘイッ！という合いの手やホッ！フ！という掛け声で唱和します。

あたしが女性群の先頭に立って踊りや歌の座を締めると、まるで一人だけ別な鳥のように目立ちました。兄さまはそんなあたしを、ニコニコ笑いながら見ており、洋々たる平和な酒盛りがたのしく進んでいきました。

やがて村人たちは感謝しながらすべて帰宅しました。

#### 4.8 別れ

そのあと二三日、一族同士、新しく夫婦になるあたしたちだけで、御神酒を飲んだり食べたりしました。燗も作って、おだやかな宴会を続けながら、悪いこともいいことも何でも話しました。兄さまやコタンラビととルベットの兄弟は冗談を飛ばし合いながら、何とまあ、朗らかによくしゃべったことでしょう。あたしたち女性陣も、男性陣とは別に愉しく語らいさんざん笑い合いました。

それから、ルベットの方々は故郷に帰ってしにかじかの出来事をご両親たちに全部聞かせてから、姉姫さまはコタンラのお館に、妹姫さまもシヌタブカのお館に来る予定であることを確認し合いました。あたしの姉さまも、もう少したってからルベットに嫁入りし、トミサンベチの山城のかみてに、山城と館を新しく築いて、そこにルベットの弟君とあたしを住まわせることだのを念入りに再確認しました。

コタンラびとに腹を踏まれた姫が物語る

兄さまは、ルベットム城主夫妻のために、汲みだての酒を別に取り分けておいたので、熊神さまの白身や脂身の大きな包みに喜びの伝言をつけて、ルベットム兄弟に持たせました。あたしと姉さまは酒糟や桑のいいところをルベットム姉妹にたくさん背負わせました。

全員男性陣も女性陣も何十回も何百回もお辞儀をくりかえし、女性陣は別れがたくて、長い間会えなくなる者みたいに、双方ではらはらと涙を流していました。

ルベットムの弟君は、ひそかにご自分の後ろにいるあたしをじっと見つめているように思われました。人目がなければ、今すぐにでもあたしを抱きしめたいと思っているみたい。あたしも「愛しいひと!」と叫んで若君の着物の裾端を今にもかき寄せたいと思いました。純潔というものを守って、一言も言葉を交わしもしなかったけれど、今はもう、ちょっとの間でもあの方を見ずに生きて行けようか。あたしは後ろを向いて涙をぬぐいました。

一同がはるか遠くに去って行く音がゴウゴウと響きます。

## 第5章 再び平和な日常

### 5.1 新居

コタンラびとも帰った後、兄さま姉さまとあたしの三人はまたシヌタブカの城で暮らしました。

兄さまは村人を指図して新しい山城や館を建てる準備を始めました。連日木を削り、木を伐る音がドシンガラガラと響きわたります。姉さまとあたしたち二人も、手伝いの大勢の人々に食べさせるべく、たくさんおいしい料理を作りました。

何一つあたしたちには手も触れさせないで、何十日も大勢の人々が働き、少し離れた丸山の上に、新築の館と大きな柵構えが完成しました。兄さまはたくさんの神宝を運び入れ、姉さまがたくさんの衣装を運び込みました。

「ようやく館が完成したから、そなたは今からこの新居に住むのだよ。もう少しでルベットムの若殿がやって来るから、その時こそ二人っきりで心ゆくまで若者同士相まみえることができるであろうぞ」

と兄さまがおっしゃったから、言い終わらぬ先にあたしは立ち上がり、針箱を抱えて飛び出しま

した。新しいお館の戸口では、宝器や財宝の香りがあたしを後ろへ押しやるほどで、館内部は何でも新しいものばかりで飾られていました。新しいこがね色の敷物は広々と敷きのべられ、炉には火が燃えていました。上座のかみ手には少数ながら選り抜きの宝刀や宝器で飾られていて、その上方は靈光がきらめいています。宝壇の手前に置かれた台座には、たくさんの紋様が飾りつけられた平金を巡らしてあります。右座がわにある二段の掛けざおには、選り抜きの金襴の着物が掛けてありました。鍋でも何でも新しく、館いっぱい黒と白のもやが入り交じってたなびいているみたいでした。兄さまは心からあたしを可愛がっているから、このようにあたしの住まいを飾ってくれたのでしょう。兄さまと姉さまは何度も出入りして、新居の完成を喜び合っていました。

ある日のこと、兄さまが、

「さあさあ上の妹よ、約束していたことだから、もうルベットムにお嫁に行きなさい」

と姉さまにおっしゃったから、姉さまは喜びながらも、あたしと別れたくなくてぐずぐずしています。

「別れる時は誰でも心細くなる。しかし長い間会えないわけではないのだよ。そなたがルベットムに行ったなら、弟君に新居の飾りつけも終わって、妹が待ち焦がれていることを伝えよ」

と兄さまが言ったので、背負い袋に嫁入り衣装をいっぱい詰め、はるかルベットムへ行ってしまいました。

その後、毎日あたしは一心不乱に針仕事をしたのですが、刺繍する手先にぶら下がっているみたいに、ルベットムの弟君が目先にちらつき、腕の力もなえてしまう。考えを他のことに逸らそうとすれば、なおさら寂しさや悲しさがつのってきます。ときどき寝床に涙をこすりつけて泣いていました。

### 5.2 再会

ああ早くルベットムの弟君に会いたいなあ、ということばかり思いながら暮らしていたところ、ある日のこと、上天気になりました。すぐに日が暮れ、トミサンベチ水源の狩り場の上で爆発音がし、客人がやって来る音が響き渡りました。やって来て外櫓の上に降りたそのとたん、上座の窓下に大鹿の投げ出される音がドウと鳴り、ルベット

ム弟君が窓から鹿を室内に入れました。それから鏝の音が響いて、訪問の咳払いが聞こえ、内土間に光を放つ赤いもやに包まれた弟君が入って来ました。

髪の毛のすきま越しに見ると、今あるく美しい>という言葉ではとても表現しきれないほどではあるけれど、顔色が沈んでいます。新しい館を愛でもせず、目を伏せながら、右座にいたあたしに向かって来ました。あたしが膝でずりながら前へ出て行くと、若君の高貴な薫りはあたしを後ろへ押しやるほどでした。

弟君はあたしの上座がわに座るやいなや、火の女神さまに向かって高々と手を上げ、今からこの館に落ち着いて住むから、われらが安眠すべくわれらに憑いて守ってくださるよう祈詞する言葉が美しく響き渡りました。それから右座の奥の隅におわす家の神にも同じように祈詞を捧げました。

祈り終えてから、あたしの肩を抱き寄せ両腕で抱きしめて、

「いとしのひとよ!わが命よ!」

と言って泣いているかのように体をふるわせ、「なるほど。勇者の末裔であるわれが、恥ずかしくなるほど恋慕っていたシヌタブカ姫であったが、まるで祭祀神でもあるかのような美貌でいらっしやる」

と言いながらあたしの額に口づけしました。あたしも泣きながら感謝の言葉を述べ、

「いとしい方よ!」

と叫んで、若君の着物の裾の両端をかきよせ、その腕から膝頭にかけて撫でさすりました。

今こそあたしたち二人きりです。日が沈みすっかり暗くなるまであたしたちは抱きしめ合い、しがみつき合い、恋の病にかかっていたことだのを告白し合って、今はもうすっかり安心しました。

### 5.3 初夜

あたしの恋人は立ち上がり、自分の手で六つの鍋づるがついた大鍋を炉かぎに掛け、鹿肉の脂身を鍋の中にぶつ切りにして茹であげました。鍋がかかっている間に、生の肝臓を切り分け、火の女神に食べていただいた後、肝臓の大きな高盛りをご自分の手であたしによそいました。自分にも大きな高盛を取り分け、自分の上座に置きました。今はじめてわが君のよき獲物をあたしは食べたのです。ほんとおいしかったこと。

鍋の中の肉がほどよく煮えたので、彼は大きな木の器を出してきて、肉や脂身を鍋から揚げ、大きな高盛にして、あたしに捧げました。あたしは高く低く掲げて拝礼して食べました。彼は自分の上座に置いた高盛を自分にも捧げ、あたしたちは大いに戴きました。

それからあたしは立ち上がって下座に行き、水で顔や手先を洗い清め、よき小鍋の取っ手の根元の方から水をかけて洗って炉かぎに掛け、干して貯えておいた精米を鍋にそそぎ入れました。プツプツと泡が煮たってくると、篋でかきまぜ、たなびく湯気をかきわけ、かきあげながら、水気のないよいご飯を炊きあげました。鍋がかかっている間も二人は冗談を言い合いました。

あたしは鍋を炉からおろし、上等な折敷と椀を出してきて膳に揃え、椀の中よりも外へ盛った方が大きい高盛飯をうやうやしく頭の上まで捧げ持ち、あたしの上座側に座るわが君に捧げました。彼は受け取って膳を高く低く掲げて拝礼し、ゆったりと半分まで食べた後、その椀をあたしに差し出しました。あたしも拝礼して残り半分を食べました。何とまあ、おいしかったこと。やがて食事の後片付けが終わると、

「さあ、いとしいひとよ。今夜そなたの寝所に二つ寝床をつくって先に寝て待っていておくれ。シヌタブカの義兄上が手ずから築いた新しい館に到着し、喜ばしい再会ができたのも、義兄上のご配慮がよかったお陰だ。シヌタブカにわれが到着したことを報告し、鹿肉の中で最もいい部分を持参して、わが両親からの伝言や、明日かあさってにはわが妹も嫁に来るだろうとかをお聞かせして、少し四方山話をして来る。もどって来たなら、神も人間も行う習慣がこのような行為なのだから、今こそ肌を暖め合い、ピタッと寄り添って心地よい眠りにつこうぞ」

と冗談めかして笑いながらおっしやる声が美しく響きました。

彼は大きな贈り物を両腕にかかえて、こがねの履を足に穿いて出て行き、やがてシヌタブカのお館から、わが君の話し声や笑い声が外まで聞こえてきました。

言いつけどおり、あたしは奥に走って行って二つの寝床をととのえて、奥のほうにある寝床にそっと身を横たえました。ゆうべお会いしてから

うち解け合い、今宵いわゆる夫婦のちぎりをすると、あたしの愛するお方が、その懐にあたしを抱いてくださるといふから、なんと気持ちが高ぶり嬉しかったことか。

シヌタプカの館に独居して寂しそうな兄さまとしばらく歓談してから、いとしいわが君が帰ってきたらしく、履の音がチャラチャラ鳴っています。

彼は自分の帯をほどき、神授の刀とこがねの兜は金属飾りがついたベルトでしばって自分の枕元に置き、金襴の小袖を脱いで、大きくたたんだその小袖を掛けざおに吊りました。

それから夜着の中にもぐりこんできて、あたしの懐を開きました。愛しいお方の肌の匂い、優れた人が発する気は強い風のようにあたしを後ろへ押しやるほどです。彼はあたしの首の下に手を通してあたしを自分の方に向け、額に口づけしました。あたしも接吻をお返しすると、わが君はあたしの乳房に手をのばして、滑っこい氷みたいにいじりまくって大笑いしました。いまこそ安眠できる寝床でよく眠り、毎日あたしたちは愛し合いました。今はもう晴れていとしきわが君の妻にあたしはなりました。

ルベットの姉妹もやって来て、それぞれシヌタプカの兄さまやコタンラびとの正妻におさまり、あたしたちの館に何度も出入りします。あたしたち夫婦も同じように行き来して、本当にお互いなかよく暮らしました。

#### 5.4 最高の人生の終わり方

トミサンベチ・シヌタプカの兄さま夫妻とあたしたち夫婦やコタンラびと夫妻、ルベットの姉さま夫婦の名声が村々を超えて神々の評判となってわき起こる一方、あたしの元婚約者であるイヨチの奴、どんな容貌の者だ知らないけれど、わがろくでなしのばあやと連れ添ったものの、ずっと炳鈎を揺すっての罵り合いをしているとの噂。そんな評判を聞けば、すぐまたばあやが可哀想になります。そんなことをしなかったならば、あたしが孝養をつくしてすことによって死後の神格が高まるものを、邪神に化かされあたしの婚約者を奪い、結局は神罰を受けたようです。少しは溜飲が下がったわ。

<sup>うちのひと</sup>夫は過不足なく大事にあたしを扱ってくれました。それでなおさらシヌタプカの兄さまはあたしたち夫婦を可愛がってくれます。

兄さまたちは山の獲物をどしどし里へ持ち帰り、沖漁に行ってはたくさんの魚を取って来ます。義姉さまたちとあたしは一緒に畑仕事をしてたくさんの倉を建て、倉いっぱい穀物を収穫しました。

わたしは夫の身のまわりをきちんと整えて愉しく暮らしました。兄さまたちは入れ替わり立ち替わり交易に行き、和へ出かける時はかわるがわる酒宴に招き合いました。

ルベットの城主夫妻も皆から孝養をつくされ、本当に喜びながら長寿をまっとうしました。

今はもうそれぞれにたくさんの子が生まれました。夫は長男を連れて狩りに行きました。長女はあたしを手伝い、あたしは畑おこしや野草に豆や粉を混ぜた料理だの、女性がすべきことを何でも娘たちに教え、他にないような幸せな暮らしをしました。

息子たちがたくさん獲物を獲ってくるため、あたしの夫はまだ若いうちに狩りを引退して、皮張りや肉裂きばかりを手伝っています。あたしの方も娘たちが上手に畑を耕してくれるから、穂ちぎりの搗きものばかりを手伝っています。子供たち全員がそれぞれ結婚し、みな子供ができました。孫にとりまかれ、あっちの孫こっちの孫をあたしは子守し、夫も孫たちを可愛がるものだから、夜も昼も可愛がり、あやす声で家じゅうがにぎやかです。息子たち娘たちは親孝行で、菜ばかり珍しいものばかり食べて、あたしたち夫婦は本当に大事にされました。

今はもう二人そろって年老いたので、息子たち娘たち孫たちすべてを呼び寄せ、たくさんお酒を醸して神祀や先祖供養をしました。よき酒宴よき食事の最中に、

「幼少の頃このようにあたしは育ち、このような経緯であたしたちは結婚して、それから生まれた者がそなたたちなのだから、あくまでも紳士たるべき行動、族長にふさわしい態度を守っていたならば、いつもいつもこのようによい生涯を送れるのですよ」

と悪い事もいい事もあたしは教えました。ルベットの嫁いだ姉さまにも何度も便りをやって、義兄さまたち夫婦にも同じように遺言をし終えました。

人間に定められた運命はこのようなことだか

ら、今りっぱに老いて生涯を終えようとするところなのですよ-とトミサンベチ・シヌタプカに生まれた妹姫が物語ったということです。